

冬学期 数学 IA 演習（足助太郎）解法集成

by @2_7182818

2013 年 2 月 9 日

ノリで解法集成と銘打ちましたが只の個人的な答案集で未完成極まっています。特に問 6.4 4)、問 9.5、問 10.2 2、問 11.6 3)、問 11.8 2)、問 12.1 b)1) 及び e)、問 13.2 2) についてのアイデア解答主義主張を広く募集していますので何かあったら是非適当な伝達手段で私にお伝え下さい。

平成 25 年 2 月 9 日 初版

平成 25 年 2 月 9 日 第 2 版 問 11.7 5) 修正

目次

第 6 回	2
第 7 回	5
第 8 回	14
第 9 回	23
第 10 回	28
第 11 回	34
第 12 回	43
第 13 回	57

第 6 回

問 6.1

1) 否定は「 $\exists n \in \mathbb{N}^+$ s.t. $a_n \leq 0$ 」。

命題は「 $n \in \mathbb{N}^+ \Rightarrow a_n > 0$ 」と書けるので対偶は「 $a_n \leq 0 \Rightarrow n \in \mathbb{N}^- \cap \{0\}$ 」。

2) 否定は「 $\forall n \in \mathbb{N}^+, a_n \leq 0$ 」。

3) 否定は「 $n > N \wedge a_n \leq 0$ 」。対偶は「 $a_n \leq 0 \Rightarrow n \leq N$ 」。

4) 否定は「 $\forall N \in \mathbb{N}^+, n > N \wedge a_n \leq 0$ 」。

問 6.2

1) 「 $\forall x \in \mathbb{R}, \forall \epsilon > 0, \exists \delta > 0$ s.t. $\forall y \in \mathbb{R}, |x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon$ 」

2) 「 $\forall \epsilon > 0, \exists \delta > 0$ s.t. $\forall x, y \in \mathbb{R}, |x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon$ 」

3) 「 $\forall x \in \mathbb{R}, \exists \epsilon > 0$ s.t. $\forall \delta > 0, \exists y \in \mathbb{R}$ s.t. $|x - y| < \delta \wedge |f(x) - f(y)| \geq \epsilon$ 」

問 6.3

1)

$$f^{(n)}(x) = (-1)^n n! x^{-(n+1)}$$

と仮定すると、これは帰納的に任意の非負整数 n について成り立つと示せる。

$$f^{(n)}(1) = (-1)^n n!$$

となるから、 f の *Taylor* 級数は

$$\sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n (x-1)^n$$

である。また $f' = -g$ より

$$g^{(n)}(1) = -f^{(n+1)}(1) = (-1)^n (n+1)!$$

となるから、 g の *Taylor* 級数は

$$\sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n (n+1) (x-1)^n$$

となる。

2) f は $[c, 2-c]$ 上 C^∞ 級関数なので、*Taylor* の定理より任意の正整数 m に対し

$$f(x) = \sum_{n=0}^m \frac{f^{(n)}(1)}{n!} (x-1)^n + \frac{f^{(n)}(1+\theta(x-1))}{(n+1)!} (x-1)^{n+1} \quad (0 < \theta < 1)$$

なる θ が存在する。この様な θ に対して

$$\begin{aligned} \left| \sum_{n=0}^m a_n (x-1)^n - f(x) \right| &= \left| \frac{f^{(n+1)}(1+\theta(x-1))}{(n+1)!} (x-1)^{n+1} \right| \\ &= \left| (-1)^{n+1} \frac{(x-1)^{n+1}}{(1+\theta(x-1))^{n+2}} \right| \\ &= \left| \frac{1}{1+\theta(x-1)} \left(\frac{x-1}{1+\theta(x-1)} \right)^{n+1} \right| \\ &\leq \max \left\{ \frac{1}{x}, 1 \right\} \cdot \left| \left(\frac{x-1}{1+\theta(x-1)} \right)^{n+1} \right| \\ &\leq \frac{1}{c} \left| \left(\frac{x-1}{1+\theta(x-1)} \right)^{n+1} \right| \end{aligned}$$

ここで

$$\begin{aligned} 1 + \theta(x-1) - (x-1) &= 1 + (\theta-1)(x-1) \\ &> 1 - (x-1) \\ &= 2 - x > 0 \end{aligned}$$

よって数列 $\left\{ \left(\frac{x-1}{1+\theta(x-1)} \right)^n \right\}_n$ は $n \rightarrow +\infty$ のとき 0 に収束するから、任意の実数 $\epsilon' > 0$ について $M \in \mathbb{N}$ が存在し

$$\forall x \in [c, 2-c], \forall m \geq M, \left| \left(\frac{x-1}{1+\theta(x-1)} \right)^{n+1} \right| < \epsilon'$$

が成り立つ。ここで $\epsilon = \epsilon'/c$ とすれば

$$\left| \sum_{n=0}^m a_n(x-1)^n - f(x) \right| \leq \frac{1}{c} \left| \left(\frac{x-1}{1+\theta(x-1)} \right)^{n+1} \right| < \epsilon$$

である。以上により

$$\forall \epsilon > 0, \exists M \in \mathbb{N} \text{ s.t. } \forall x \in [c, 2-c], \forall m \geq M, \left| \sum_{n=0}^m a_n(x-1)^n - f(x) \right| < \epsilon$$

が示された。

3) f の Taylor 級数

$$\sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n (x-1)^n$$

を項別微分すると

$$\sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n n (x-1)^{n-1} = - \sum_{n=0}^{+\infty} (-1)^n (n+1) (x-1)^n$$

となり、 $f' = -g$ の Taylor 級数と一致する。

問 6.4

- 1) 問題に於ける T の定義は、既に定義されている ℓ を「ある C^∞ 級の曲線」として扱っている（様に見える）点や t_0 が未定義である点など明らかにおかしい。今一つ判然としないが、 ℓ, t_0 を固定して

$$T = T_{\ell(t_0)} \mathbb{R}^2 = \{ v \in \mathbb{R}^2 \mid \text{或る } C^\infty \text{ 級の曲線 } \ell_0 \text{ について } \ell_0(t_0) = \ell(t_0) \text{ 且つ } v = D\ell_0(t_0) \}$$

と定義したかったと思われる。以下この定義に従う。

定義より $T \subset \mathbb{R}^2$ は明らか。任意の $v \in \mathbb{R}^2$ について、 $\ell_0(t) = \ell(t_0) + v(t-t_0)$ とすると ℓ_0 は C^∞ 級の曲線となるので $D\ell_0(t_0) = v$ 。よって $v \in T$ より $\mathbb{R}^2 \subset T$ 。以上より $T = \mathbb{R}^2$ が示された。

- 2) φ, ℓ は共に C^∞ 級の関数なので ℓ' も C^∞ 級である。

- 3) $D\ell' = D\varphi \circ \ell \cdot D\ell$ より

$$D\ell'(t_0) = D\varphi(\ell(t_0))D\ell(t_0)$$

- 4) $v, w \in T_{\ell(t_0)} \mathbb{R}^2$ とすると、任意の $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$ について

$$\begin{aligned} F(\alpha v_1 + \beta v_2) &= D\varphi(\ell(t_0))(\alpha v_1 + \beta v_2) \\ &= \alpha D\varphi(\ell(t_0))v_1 + \beta D\varphi(\ell(t_0))v_2 \\ &= \alpha F(v_1) + \beta F(v_2) \end{aligned}$$

が成り立つから F は実線型写像である。

5) F の線型性より、 $e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ として任意の $v = \begin{pmatrix} v_1 \\ v_2 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ について

$$\begin{aligned} F(v) &= F(v_1 e_1 + v_2 e_2) \\ &= v_1 F(e_1) + v_2 F(e_2) \end{aligned}$$

が成り立つ。よって $F(e_1) = \begin{pmatrix} a_{11} \\ a_{21} \end{pmatrix}$, $F(e_2) = \begin{pmatrix} a_{12} \\ a_{22} \end{pmatrix}$ とすると行列 $A = (a_{ij}) \in M_2(\mathbb{R})$ が一意に定まり

$$F(v) = Av$$

である。

又 $\ell(t_0) = \begin{pmatrix} \ell_1(t_0) \\ \ell_2(t_0) \end{pmatrix}$ として

$$\begin{aligned} D\varphi(\ell(t_0)) &= \begin{pmatrix} D_1\varphi_1 & D_2\varphi_1 \\ D_1\varphi_2 & D_2\varphi_2 \end{pmatrix} (\ell(t_0)) \\ &= \begin{pmatrix} \cos \theta & -r \sin \theta \\ \sin \theta & r \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \ell_1(t_0) \\ \ell_2(t_0) \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos(\ell_2(t_0)) & -\ell_1(t_0) \sin(\ell_2(t_0)) \\ \sin(\ell_2(t_0)) & \ell_1(t_0) \cos(\ell_2(t_0)) \end{pmatrix} \end{aligned}$$

より

$$A = \begin{pmatrix} \cos(\ell_2(t_0)) & -\ell_1(t_0) \sin(\ell_2(t_0)) \\ \sin(\ell_2(t_0)) & \ell_1(t_0) \cos(\ell_2(t_0)) \end{pmatrix}$$

第 7 回

問 7.1

f は連続なので、任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $\delta > 0$ が存在し、

$$\forall x \in \mathbb{R}^n, \forall y \in \mathbb{R}^n, |x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon$$

が成り立つ。

ここで、或る $a_0, b_0 \in \mathbb{R}^n$ について $f(a_0) \neq f(b_0)$ とする。任意の $n \in \mathbb{Z}^+$ について (a_n, b_n) を以下で定める。

$$(a_n, b_n) = \begin{cases} \left(\frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2}, b_{n-1} \right) & f\left(\frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2}\right) = f(a_{n-1}) \\ \left(a_{n-1}, \frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2} \right) & f\left(\frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2}\right) \neq f(a_{n-1}) \end{cases}$$

定義より $f(a_n) \neq f(b_n)$ だが、 $f(x) \in \mathbb{Z}$ なので $|f(a_n) - f(b_n)| \geq 1$ である。また、 $|b_n - a_n| = \frac{1}{2}|b_{n-1} - a_{n-1}| = \left(\frac{1}{2}\right)^n |b_0 - a_0|$ より $|b_n - a_n|$ は $n \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束するから、任意の $\epsilon' > 0$ に対して或る $N > 0$ が存在し、

$$n \geq N \Rightarrow |b_n - a_n| < \epsilon'$$

ここで $\epsilon' = \delta$ とすれば

$$\forall \epsilon > 0, \exists N > 0 \text{ s.t. } n \geq N \Rightarrow |f(b_n) - f(a_n)| < \epsilon$$

が成り立つ。ところが $|f(b_n) - f(a_n)| \geq 1$ であるからこれは矛盾である。よって $f(a_0) = f(b_0)$ となり、 f は定数関数。

g について、或る $a_0, b_0 \in \mathbb{R}^n$ が存在して $g(a_0) < g(b_0)$ とする。ここで $r \in \mathbb{R} \setminus \mathbb{Q}$ で $g(a_0) < r < g(b_0)$ なるものを任意に選ぶ。以下 $a_0 < b_0$ とする。

任意の $n \in \mathbb{Z}^+$ について (a_n, b_n) を以下で定める。

$$(a_n, b_n) = \begin{cases} \left(\frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2}, b_{n-1} \right) & g\left(\frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2}\right) < r \\ \left(a_{n-1}, \frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2} \right) & g\left(\frac{a_{n-1} + b_{n-1}}{2}\right) > r \end{cases}$$

$a_0 \leq a_n < b_n \leq b_0$ かつ $|b_n - a_n| = \frac{1}{2}|b_{n-1} - a_{n-1}| = \left(\frac{1}{2}\right)^n |b_0 - a_0|$ より $|b_n - a_n|$ は $n \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束するから、 a_n, b_n は共に或る値 c へ収束し、定義から $g(a_n) < r < g(b_n)$ なので $g(c) = r$ が成り立つ。しかし $g(x) \in \mathbb{Q}$ 故これは矛盾である。よって g は定数関数。 $a_0 > b_0$ の場合も同様。

問 7.2

v_1, \dots, v_n を並べた行列の行列式を $f(v_1, \dots, v_n)$ とし、 \mathbb{R}^{n^2} 上の関数と看做す。 v_1, \dots, v_n は線型独立なので $f(v_1, \dots, v_n) \neq 0$ である。ここで f は連続関数なので、任意の $\epsilon > 0$ について $\delta' > 0$ が存在し、

$$\sqrt{\sum_{i=1}^n \|w_i - v_i\|^2} < \delta' \Rightarrow |f(w_1, \dots, w_n) - f(v_1, \dots, v_n)| < \epsilon$$

が成り立つ。特に $\epsilon < |f(v_1, \dots, v_n)|$ とすれば $f(w_1, \dots, w_n) \neq 0$ である。また、ある $\delta > 0$ について $\delta < \delta'^2/n$ とすれば、 $\forall i, \|w_i - v_i\| < \delta$ なる時

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \|w_i - v_i\|^2 &< n\delta < \delta'^2 \\ \sqrt{\sum_{i=1}^n \|w_i - v_i\|^2} &< \delta' \end{aligned}$$

が成り立つ。以上より

$$\exists \delta > 0 \text{ s.t. } \forall i, \|w_i - v_i\| > \delta \Rightarrow f(w_1, \dots, w_n) \neq 0$$

となり、この時 w_1, \dots, w_n は線型独立である。

問 7.3

1) f が U 上一様連続であるとき、任意の $\epsilon > 0$ に対し或る $\delta > 0$ が存在し

$$\forall x, y \in U, \|x - y\| < \delta \Rightarrow \|f(x) - f(y)\| < \epsilon$$

が成り立つ。ここで $y = a$ と固定すると

$$\forall x \in U, \|x - a\| < \delta \Rightarrow \|f(x) - f(a)\| < \epsilon$$

となり

$$\forall a \in U, \forall \epsilon > 0, \exists \delta > 0 \text{ s.t. } \forall x \in U, \|x - a\| < \delta \Rightarrow \|f(x) - f(a)\| < \epsilon$$

が成り立つ。よって f は U 上各点連続である。

2) $n = m = 1$ の場合について、 $f(x) = x^2$ と置く。ここで $x = n + \frac{1}{n}$, $y = n$ ($n \in \mathbb{N}^+$) とすると、 $|x - y| = \frac{1}{n}$ 及び $|f(x) - f(y)| = |2 + \frac{1}{n^2}| > 2$ が成り立つ。ここで $n \rightarrow \infty$ の時 $\frac{1}{n} \rightarrow 0$ なので、 $\frac{1}{n}$ が任意の値よりも小さくなる様に n が取れる。よって $\epsilon \leq 2$ とすると、任意の $\delta > 0$ について $|x - y| < \delta$ だが $|f(x) - f(y)| < \epsilon$ が成り立たない n が存在する (\Rightarrow その様な x, y が存在する)。これは「 f が一様連続である事の否定命題「 $\exists \epsilon > 0 \text{ s.t. } \forall \delta > 0, \exists x, y \in \mathbb{R} \text{ s.t. } \neg(|x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon)$ 」を示しているから、 f は一様連続でない。

3) $n = 1$ の場合について、 $f(x) = \frac{1}{x-1}$ と置く。ここで $x = \frac{1}{n} + 1$, $y = \frac{1}{n+1} + 1$ ($n \in \mathbb{N}^+$) とすると、 $|x - y| = \frac{1}{n(n+1)}$ 及び $|f(x) - f(y)| = |n - (n+1)| = 1$ が成り立つ。よって $\epsilon < 1$ とすると、任意の $\delta > 0$ について $|x - y| < \delta$ だが $|f(x) - f(y)| < \epsilon$ が成り立たない n が存在する。よって f は一様連続でない。

問 7.4

$P = [a_1, b_1] \times \dots \times [a_n, b_n]$ とする。 $x \in P_c$ ならば $y \in P$ が存在して $x = y + c$ となるから、 $a_k \leq y_k \leq b_k$ より $a_k + c_k \leq x \leq b_k + c_k$ となる。よって $P_c = [a_1 + c_1, b_1 + c_1] \times \dots \times [a_n + c_n, b_n + c_n]$ であり、 P_c は閉区間の直積である。

P_c の任意の分割 Δ' 及び代表点 ξ'_k を平行移動により P の分割 Δ 及び代表点 $\xi_k = \xi'_k - c_k$ と結びつける事で

$$\sum_{k=1}^{k(\Delta')} f_c(\xi'_k) v(I'_k) = \sum_{k=1}^{k(\Delta)} f(\xi_k) v(I_k)$$

が成り立つ。 f は可積分関数なので $\delta(\Delta) \rightarrow 0$ の時右辺は収束し、よって左辺も $\delta(\Delta') \rightarrow 0$ で収束するから f_c も P_c 上可積分である。

問 7.5

f, g は可積分なので f, g は P 上有界であり、或る $C \geq 0$ が存在して $|f(x)| \leq C$, $|g(x)| \leq C$ が成り立つ。この時任意の $x, y \in P$ について

$$\begin{aligned} |f(x)g(x) - f(y)g(y)| &= |f(x)(g(x) - g(y)) + (f(x) - f(y))g(y)| \\ &\leq C|g(x) - g(y)| + C|f(x) - f(y)| \end{aligned}$$

が成り立つので、

$$a(fg, I_k) \leq C(a(f, I_k) + a(g, I_k))$$

となる *1。ここで P が分割 Δ により閉区間の直積の集合 $\mathcal{I}(\Delta) = \{I_1, \dots, I_{k(\Delta)}\}$ に分割されるとすると、

$$\begin{aligned} \sum_{k=1}^{k(\Delta)} a(fg, I_k)v(I_k) &\leq \sum_{k=1}^{k(\Delta)} C(a(f, I_k) + a(g, I_k))v(I_k) \\ &= C \left(\sum_{k=1}^{k(\Delta)} a(f, I_k)v(I_k) + \sum_{k=1}^{k(\Delta)} a(g, I_k)v(I_k) \right) \end{aligned}$$

となるが、右辺は f, g が可積分である事から $\delta(\Delta) \rightarrow 0$ の時 0 に収束する。よって

$$\lim_{\delta(\Delta) \rightarrow 0} \sum_{k=1}^{k(\Delta)} a(fg, I_k)v(I_k) = 0$$

が成り立つから fg は P 上可積分である。

問 7.6

$$\begin{aligned} \int_0^t x^n dx &= \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{m=1}^N \left(\frac{m}{N} t \right)^n \frac{1}{N} \\ &= t^n \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{1}{N^{n+1}} \sum_{m=1}^N m^n \end{aligned}$$

ここで $S_n(N) = \sum_{m=1}^N m^n$ として、 $S_n(N) = \frac{1}{n+1} N^{n+1} + O(N^n)$ を示す。 $S_0(N) = N$ より $n = 0$ について成り立つ。或る n について成り立つ時、

$$\begin{aligned} m^{n+1} - (m-1)^{n+1} &= m^{n+1} - \sum_{i=0}^{n+1} \binom{n+1}{i} (-1)^{n+1-i} m^i \\ &= \sum_{i=0}^n \binom{n+1}{i} (-1)^{n-i} m^i \\ \sum_{m=1}^N \{m^{n+1} - (m-1)^{n+1}\} &= \sum_{m=1}^N \sum_{i=0}^n \binom{n+1}{i} (-1)^{n-i} m^i \\ N^{n+1} &= \sum_{i=0}^n \binom{n+1}{i} (-1)^{n-i} \sum_{m=1}^N m^i \\ &= \sum_{i=0}^{n-1} \binom{n+1}{i} (-1)^{n-i} S_i(N) + \binom{n+1}{n} S_n(N) \\ S_n(N) &= \frac{1}{n+1} N^{n+1} - \frac{1}{n+1} \sum_{i=0}^{n-1} \binom{n+1}{i} (-1)^{n-i} S_i(N) \\ &= \frac{1}{n+1} N^{n+1} + O(N^n) \end{aligned}$$

となるから、帰納的に任意の $n \geq 0$ について成り立つ。よって

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{N^{n+1}} S_n(N) = \frac{1}{n+1}$$

となるので、

$$\int_0^t x^n dx = \frac{1}{n+1} t^{n+1}$$

*1 誰が考えるんでしょうねこんなの。

問 7.7

任意の区間 $I \subset [0, 1]$ について、 I 上には有理数と無理数が共に存在するから、 f の $[0, 1]$ 上の不足和、過剰和は必ずそれぞれ $0, 1$ となり一致しない。よってリーマン可積分でない。

問 7.8

1)

$$\begin{aligned} \int \frac{dx}{(x-a)^k} &= \int \frac{d(x-a)}{(x-a)^k} \\ &= \begin{cases} \log|x-a| + C & (k=1) \\ -\frac{1}{k-1} \frac{1}{(x-a)^{k-1}} + C & (k>1) \end{cases} \end{aligned}$$

C は積分定数である。

2) $x = b \tan \varphi$ として $dx = b d\varphi / (\cos \varphi)^2$ より

$$\begin{aligned} \int \frac{dx}{(x^2 + b^2)^k} &= \frac{1}{b^{2k-1}} \int \frac{1}{(\tan^2 \varphi + 1)^k} \frac{d\varphi}{(\cos \varphi)^2} \\ &= \frac{1}{b^{2k-1}} \int \frac{d\varphi}{(\tan^2 \varphi + 1)^{k-1}} \\ &= \frac{1}{b^{2k-1}} \int (\cos^2 \varphi)^{k-1} d\varphi \end{aligned}$$

$I_n(x) = \int (\cos^2 x)^n dx$ とすると、 $I_0(x) = x$, $I_1(x) = \int \cos^2 x dx = \frac{1}{2} \int (1 + \cos 2x) dx = \frac{1}{2}(x + \cos x \sin x)$ であり

$$\begin{aligned} I_n(x) &= \int \cos^{2n-1} x (\sin x)' dx \\ &= \cos^{2n-1} x \sin x + (2n-1) \int (\cos^2 x)^{n-1} \sin^2 x dx \\ &= \cos^{2n-1} x \sin x + (2n-1) \int (\cos^2 x)^{n-1} dx - (2n-1) \int (\cos^2 x)^n dx \\ 2nI_n(x) &= \cos^{2n-1} x \sin x + (2n-1)I_{n-1}(x) \\ &= \frac{2n-1}{2n-2} \cdot 2(n-1)I_{n-1}(x) + \cos^{2n-1} x \sin x \\ &= \frac{2n-1}{2n-2} \left(\frac{2n-3}{2n-4} \cdot 2(n-2)I_{n-2}(x) + \cos^{2n-3} x \sin x \right) + \cos^{2n-1} x \sin x \\ &= 2 \frac{(2n-1)!!}{(2n-2)!!} I_1(x) + \left(\sum_{k=2}^n \frac{(2n-1)!!}{(2n-2)!!} \frac{(2k-1)!!}{(2k-2)!!} \cos^{2k-1} x \right) \sin x \end{aligned}$$

ここで

$$\frac{(2n-1)!!}{(2n-2)!!} = 2n \frac{(2n)!}{(2^n n!)^2} = 2n \frac{(2n)!}{4^n (n!)^2}$$

となるから

$$\begin{aligned} 2nI_n(x) &= \frac{n(2n)!}{2^{2n-1}(n!)^2} \left\{ (x + \cos x \sin x) + \left(\sum_{k=2}^n \frac{2^{2k-1}(k!)^2}{k(2k)!} \cos^{2k-1} x \right) \sin x \right\} \\ I_n(x) &= \frac{(2n)!}{4^n (n!)^2} \left\{ x + \left(\sum_{k=1}^n \frac{4^k (k!)^2}{2k(2k)!} \cos^{2k-1} x \right) \sin x \right\} \end{aligned}$$

よって

$$\begin{aligned}\int \frac{dx}{(x^2 + b^2)^k} &= \frac{1}{b^{2k-1}} I_{k-1}(\varphi) \\ &= \frac{1}{b^{2k-1}} \frac{(2(k-1))!}{4^{k-1}((k-1)!)^2} \left\{ \varphi + \left(\sum_{m=1}^{k-1} \frac{4^m(m!)^2}{2m(2m)!} \cos^{2m-1} \varphi \right) \sin \varphi \right\}\end{aligned}$$

$\varphi = \arctan \frac{x}{b}$ より

$$\int \frac{dx}{(x^2 + b^2)^k} = \frac{1}{b^{2k-1}} \frac{(2(k-1))!}{4^{k-1}((k-1)!)^2} \left[\arctan \frac{x}{b} + \left\{ \sum_{m=1}^{k-1} \frac{4^m(m!)^2}{2m(2m)!} \left(\cos \arctan \frac{x}{b} \right)^{2m-1} \right\} \sin \arctan \frac{x}{b} \right] + C$$

を得る *2。

3)

$$\begin{aligned}\int \frac{x dx}{(x^2 + b^2)^k} &= \frac{1}{2} \int \frac{d(x^2 + b^2)}{(x^2 + b^2)^k} \\ &= \begin{cases} \frac{1}{2} \log(x^2 + b^2) + C & (k = 1) \\ -\frac{1}{2} \frac{1}{k-1} \frac{1}{(x^2 + b^2)^{k-1}} + C & (k > 1) \end{cases}\end{aligned}$$

4)

$$\begin{aligned}\int \frac{cx + d}{((x-a)^2 + b^2)^k} dx &= \int \frac{c(x-a) + ac + d}{((x-a)^2 + b^2)^k} dx \\ &= c \int \frac{(x-a)d(x-a)}{((x-a)^2 + b^2)^k} + (ac + d) \int \frac{d(x-a)}{((x-a)^2 + b^2)^k}\end{aligned}$$

とすれば上より求まる。

問 7.9

$\deg f \leq \deg g$ ならば、約分により多項式 $r(t)$ を用いて $\frac{g(t)}{f(t)}$ を $\frac{g'(t)}{f(t)} + r(t)$ ($\deg g' < \deg f$) の形に書き直す事が出来る。 $\int r(t)dt$ は多項式となるので、 $\deg g \leq \deg f$ の場合について示せばよい。

$f(t)$ の実根を $\{a_1, \dots, a_r\}$ 、虚根を $\{b_1 + ic_1, \dots, b_s + ic_s\}$ ($b_n, c_n \in \mathbb{R}$) とすると、虚根は適宜並び替える事で $b_n + ic_n = \overline{b_{s-n} + ic_{s-n}} = b_{s-n} - ic_{s-n}$ を満たす様にする事が出来る。この時、

$$\begin{aligned}f(t) &= f(0) \prod_{n=1}^r (t - a_n)^{k_n} \prod_{n=1}^{s/2} (t - b_n - ic_n)^{l_n} (t - b_{s-n} + ic_{s-n})^{l_n} \\ &= f(0) \prod_{n=1}^r (t - a_n)^{k_n} \prod_{n=1}^{s/2} ((t - b_n)^2 + c_n^2)^{l_n}\end{aligned}$$

となるから

$$\frac{g(t)}{f(t)} = \frac{g(0)}{f(0)} \left(\sum_{n=1}^r \sum_{m=1}^{k_n} \frac{A_{n,m}}{(t - a_n)^m} + \sum_{n=1}^{s/2} \sum_{m=1}^{l_n} \frac{B_{n,m}x + C_{n,m}}{((t - b_n)^2 + c_n^2)^m} \right)$$

と部分分数分解できる。よって前問からこの積分は初等関数で表される。

*2 明示公式が欲しくてやった。反省はしていない。

問 7.10

1)

$$\begin{aligned}
 L &= \sqrt{(2\delta)^2 + (g(t+\delta) - g(t-\delta))^2} \\
 &= \sqrt{(2\delta)^2 + (2\delta Df(t))^2} \\
 &= 2\delta \sqrt{1 + (Df(t))^2} \\
 h(t) &= \sqrt{1 + (Df(t))^2}
 \end{aligned}$$

2)

$$Df(x) = -\frac{x}{\sqrt{1-x^2}}$$

より

$$\begin{aligned}
 \int_c^d h(t) dt &= \int_c^d \sqrt{1 + \frac{t^2}{1-t^2}} dt \\
 &= \int_c^d \frac{dt}{\sqrt{1-t^2}}
 \end{aligned}$$

 $t = \cos \varphi$ とすると $dt = -\sin \varphi d\varphi$ なので

$$\begin{aligned}
 \int_c^d \frac{dt}{\sqrt{1-t^2}} &= -\int_{\arccos c}^{\arccos d} d\varphi \\
 &= \arccos c - \arccos d \\
 &= \theta
 \end{aligned}$$

3)

$$Df(x) = -\frac{\alpha^2 x}{\sqrt{1-\alpha^2 x^2}}$$

なので

$$\int_{-1/\alpha}^t \sqrt{1 + \frac{\alpha^4 t^2}{1-\alpha^2 t^2}} dt = \int_{-1/\alpha}^t \sqrt{\frac{1-\alpha^2(1-\alpha^2)t^2}{1-\alpha^2 t^2}} dt$$

 $u = \alpha t$ とすると $du = \alpha dt$ であり

$$\frac{1}{\alpha} \int_{-1}^{\alpha t} \sqrt{\frac{1-(1-\alpha^2)u^2}{1-u^2}} du$$

問 7.11

1)

$$D\ell(t) = \begin{pmatrix} 1 \\ Df(t) \end{pmatrix}$$

より

$$L(c, d) = \int_c^d \sqrt{1 + (Df(t))^2} dt$$

2)

$$\begin{aligned}
 L(c, d) &= \int_c^d \sqrt{\sin^2 t + \cos^2 t} dt \\
 &= \int_c^d dt \\
 &= d - c
 \end{aligned}$$

3)

$$\begin{aligned}
 L(c, d) &= \int_c^d \sqrt{\sinh^2 t + \cosh^2 t} dt \\
 &= \int_c^d \sqrt{\cosh 2t} dt \\
 &= \int_c^d \sqrt{\frac{e^{2t} + e^{-2t}}{2}} dt
 \end{aligned}$$

$u^{-1} = e^{2t} + e^{-2t}$ とすると $-u^{-2} du = 2(e^{2t} - e^{-2t}) dt = 2\sqrt{(e^{2t} + e^{-2t})^2 - 4} dt = 2\sqrt{u^2 - 4} dt$ より

$$\int_c^d \sqrt{\frac{e^{2t} + e^{-2t}}{2}} dt = -\frac{1}{2\sqrt{2}} \int_{1/(e^{2c} + e^{-2c})}^{1/(e^{2d} + e^{-2d})} \frac{1}{u\sqrt{u(u^2 - 4)}} du$$

? *3

問 7.12

$$\begin{aligned}
 \sqrt[n]{z} &= z^{\frac{1}{n}} \\
 &= \exp\left(\frac{1}{n} \log z\right)
 \end{aligned}$$

ここで $\log z = \operatorname{Log} z + 2\pi im$ ($m \in \mathbb{Z}$) とすると

$$\sqrt[n]{z} = \exp\left(\frac{1}{n} \operatorname{Log} z\right) \exp\left(2\pi i \frac{m}{n}\right)$$

ここで $\frac{m}{n} \in \mathbb{Z}$ ならば $\exp\left(2\pi i \frac{m}{n}\right) = 1$ なので、 $\sqrt[n]{z}$ は $m = 1, \dots, n$ について相異なる値を取る。よって n 個の分枝が生じる。

問 7.13

$$\begin{aligned}
 a^z a^w &= \exp\{z(\operatorname{Log} a + 2\pi in)\} \exp\{w(\operatorname{Log} a + 2\pi in)\} \quad (n \in \mathbb{Z}) \\
 &= \exp\{(z + w)(\operatorname{Log} a + 2\pi in)\} \\
 &= a^{z+w}
 \end{aligned}$$

より指数法則を満たす。

$z = \frac{p}{q} \in \mathbb{Q}$ ($\gcd(p, q) = 1$, $q \geq 1$) ならば前問より q 個の分枝が生じる。 z が無理数であれば、 $nz \in \mathbb{Z}$ なる整数 n は存在しないので無数の分枝が生じる。 $z = x + iy$ ($x, y \in \mathbb{R}$, $y \neq 0$) ならば

$$\begin{aligned}
 a^z &= \exp\{(x + iy)(\operatorname{Log} a + 2\pi in)\} \quad (n \in \mathbb{Z}) \\
 &= \exp\{(x + iy)\operatorname{Log} a + 2\pi inx - 2\pi ny\}
 \end{aligned}$$

となり無数の分枝が生じる。

問 7.14

1)

$$\frac{dy}{dx} = \cos x = \pm \sqrt{1 - y^2}$$

*3 WolframAlpha 大先生によると $\int \sqrt{\frac{1+4x^2}{1+x^2}} dx$ なる第二種楕円積分になる。らしいです？

2) $\sin x$ は連続写像であり $[-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}]$ 上狭義単調増加なので、定理 2.2.19 より全単射であり、逆写像が存在して連続である。

3) $[-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}]$ に於いて $\frac{dy}{dx} \geq 0$ より

$$\frac{d\operatorname{Arcsin} y}{dy} = 1 \Big/ \frac{dy}{dx} = \frac{1}{\sqrt{1-y^2}}$$

よって $\operatorname{Arcsin} 0 = 0$ より

$$\operatorname{Arcsin} y = \int_0^y \frac{dy'}{\sqrt{1-y'^2}}$$

問 7.15

1) $x = \cos^{-1} y \geq 0$ と置くと、 $[-1, 1]$ 上で $\frac{dy}{dx} < 0$ なので

$$\frac{dx}{dy} = -\frac{1}{\sin x} = -\frac{1}{\sqrt{1-y^2}}$$

となり、 $\operatorname{Arccos} 1 = 0$ より

$$\operatorname{Arccos} y = -\int_1^y \frac{dy'}{\sqrt{1-y'^2}} = \int_y^1 \frac{dy'}{\sqrt{1-y'^2}}$$

2) $x = \tan^{-1} y$ と置くと

$$\frac{dx}{dy} = \cos^2 x = \frac{1}{1+y^2}$$

となり、 $\operatorname{Arctan} 0 = 0$ より

$$\operatorname{Arctan} y = \int_0^y \frac{dy'}{1+y'^2}$$

3)

$$\tan^{-1} y = \int_0^y \frac{dy'}{1+y'^2} + 2\pi$$

問 7.16

1) $z \in V$ について $w \in U$ が存在して $z = \exp w$ が成り立つ。この時

$$\log z = w$$

$$\operatorname{Log} z + 2\pi in = w \quad (n \in \mathbb{Z})$$

$$\operatorname{Log} z = w - 2\pi in$$

$\operatorname{Log} z$, $w \in U$ より $n = 0$ なので、 Log は V 上で一価函数である。

2) $\operatorname{Log} 1 = 0$ より

$$f(w) = w$$

3) $\exp(\tilde{\ell}(t)) = \ell(t)$ より

$$\tilde{\ell}(t) = \log \ell(t) = \operatorname{Log} \ell(t) + 2\pi in \quad (n \in \mathbb{Z})$$

$\tilde{\ell}(0) = 0$ より $n = 0$ なので、 $\tilde{\ell}$ は一意に定まる。

4)

$$\begin{aligned} \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \int_0^1 \frac{D\ell(t)}{\ell(t)} dt &= \frac{1}{2\pi i} \int_0^1 \frac{2\pi in\ell(t)}{\ell(t)} dt \\ &= n \int_0^1 dt \\ &= n \end{aligned}$$

また

$$\ell(1) = \exp(2\pi in)$$

$$\tilde{\ell}(1) = 2\pi in$$

第 8 回

問 8.1

1)

$$\int \frac{dx}{\sqrt{x^2 + 2px + q}} = \int \frac{dx}{\sqrt{(x+p)^2 + q - p^2}}$$

$x + p = \sqrt{q - p^2} \tan t$ とすると $dx = \sqrt{q - p^2} \frac{dt}{\cos^2 t}$ であり

$$\begin{aligned} \int \frac{dx}{\sqrt{(x+p)^2 - (p^2 - q)}} &= \int \frac{1}{\sqrt{\tan^2 t + 1}} \frac{dt}{\cos^2 t} \\ &= \int \frac{\cos t}{1 - \sin^2 t} dt \end{aligned}$$

$s = \sin t$ とすると、 $s = \tan t / \sqrt{1 + \tan^2 t} = (x + p) / \sqrt{q - p^2 + (x + p)^2} = (x + p) / \sqrt{x^2 + 2px + q}$ となり

$$\begin{aligned} \int \frac{\cos t}{1 - \sin^2 t} dt &= \frac{1}{2} \int \left(\frac{1}{s+1} - \frac{1}{s-1} \right) ds \\ &= \frac{1}{2} \log \left| \frac{s+1}{s-1} \right| + C \\ &= \frac{1}{2} \log \left| \frac{x+p+\sqrt{x^2+2px+q}}{x+p-\sqrt{x^2+2px+q}} \right| + C \end{aligned}$$

2)

$$\begin{aligned} \int \frac{\cot x}{\log |\sin x|} dx &= \int \frac{(\log |\sin x|)'}{\log |\sin x|} dx \\ &= \log |\log |\sin x|| + C \end{aligned}$$

3)

$$\begin{aligned} \int e^{ax} \cos bx \, dx &= \int e^{ax} \frac{e^{ibx} + e^{-ibx}}{2} dx \\ &= \frac{1}{2} \int (e^{(a+ib)x} + e^{(a-ib)x}) dx \\ &= \frac{1}{2(a^2 + b^2)} \left\{ (a - ib)e^{(a+ib)x} + (a + ib)e^{(a-ib)x} \right\} + C \\ &= \frac{1}{a^2 + b^2} e^{ax} \left(a \frac{e^{ibx} + e^{-ibx}}{2} + b \frac{e^{ibx} - e^{-ibx}}{2i} \right) + C \\ &= \frac{1}{a^2 + b^2} e^{ax} (a \cos bx + b \sin bx) + C \end{aligned}$$

4) $x^4 - 1 = (x^2 + 1)(x + 1)(x - 1)$ より

$$\frac{x}{x^4 - 1} = \frac{\alpha x + \beta}{x^2 + 1} + \frac{\gamma}{x + 1} + \frac{\delta}{x - 1}$$

とすると

$$\begin{aligned}\alpha x + \beta + \frac{x^2 + 1}{x + 1}\gamma + \frac{x^2 + 1}{x - 1}\delta &= \frac{x}{x^2 - 1} \\ \alpha i + \beta &= \frac{i}{-2} \\ \frac{x + 1}{x^2 + 1}(\alpha x + \beta) + \gamma + \frac{x + 1}{x - 1}\delta &= \frac{x}{x^3 - x^2 + x - 1} \\ \gamma &= \frac{-1}{-4} \\ \frac{x - 1}{x^2 + 1}(\alpha x + \beta) + \frac{x - 1}{x + 1}\gamma + \delta &= \frac{x}{x^3 + x^2 + x + 1} \\ \delta &= \frac{1}{4}\end{aligned}$$

となるので (*Heaviside cover-up method*)

$$\begin{aligned}\frac{x}{x^4 - 1} &= \frac{1}{4} \left(-\frac{2x}{x^2 + 1} + \frac{1}{x + 1} + \frac{1}{x - 1} \right) \\ \int \frac{x}{x^4 - 1} dx &= \frac{1}{4} \left(-\int \frac{2x}{x^2 + 1} dx + \int \frac{1}{x + 1} dx + \int \frac{1}{x - 1} dx \right) \\ &= \frac{1}{4} (-\log |x^2 + 1| + \log |x + 1| + \log |x - 1|) + C \\ &= \frac{1}{4} \log \left| \frac{x^2 - 1}{x^2 + 1} \right| + C\end{aligned}$$

5)

$$\frac{2x - 5}{(x + 3)(x + 1)^2} = \frac{\alpha}{x + 3} + \frac{\beta}{x + 1} + \frac{\gamma}{(x + 1)^2}$$

とすると

$$\begin{aligned}\alpha + \frac{x + 3}{x + 1}\beta + \frac{x + 3}{(x + 1)^2}\gamma &= \frac{2x - 5}{(x + 1)^2} \\ \alpha &= -\frac{11}{4} \\ \frac{(x + 1)^2}{x + 3}\alpha + (x + 1)\beta + \gamma &= \frac{2x - 5}{x + 3} \\ \gamma &= -\frac{7}{2}\end{aligned}$$

また

$$\begin{aligned}\frac{\alpha}{x + 3} + \frac{\beta}{x + 1} &= \frac{2x - 5 - \gamma(x + 3)}{(x + 3)(x + 1)^2} \\ &= \frac{11}{2(x + 3)(x + 1)} \\ \frac{x + 1}{x + 3}\alpha + \beta &= \frac{11}{2(x + 3)} \\ \beta &= \frac{11}{4}\end{aligned}$$

となるので

$$\frac{2x - 5}{(x + 3)(x + 1)^2} = \frac{1}{4} \left(-\frac{11}{x + 3} + \frac{11}{x + 1} - \frac{14}{(x + 1)^2} \right)$$

$x = \tan \varphi$ とすると $\int \frac{dx}{(x+1)^2} = \int d\varphi = \varphi + C = \arctan x + C$ なので

$$\begin{aligned} \int \frac{2x-5}{(x+3)(x+1)^2} dx &= \frac{1}{4} \left(-\int \frac{11}{x+3} dx + \int \frac{11}{x+1} dx - \int \frac{14}{(x+1)^2} dx \right) \\ &= \frac{1}{4} (-11 \log |x+3| + 11 \log |x+1| - 14 \arctan x) + C \\ &= \frac{1}{4} \left(11 \log \left| \frac{x+1}{x+3} \right| - 14 \arctan x \right) + C \end{aligned}$$

6)

$$\int \frac{x^7}{x^{12}-1} dx = \frac{1}{4} \int \frac{x^4}{x^{12}-1} (x^4)' dx$$

$u = x^4$ とすると

$$\frac{1}{4} \int \frac{x^4}{x^{12}-1} x^3 dx = \frac{1}{4} \int \frac{u}{u^3-1} du$$

ここで

$$\frac{u}{u^3-1} = \frac{\alpha}{u-1} + \frac{\beta u + \gamma}{u^2+u+1}$$

とすると

$$\begin{aligned} \alpha + \frac{u-1}{u^2+u+1}(\beta u + \gamma) &= \frac{u}{u^2+u+1} \\ \alpha &= \frac{1}{3} \\ \frac{\beta u + \gamma}{u^2+u+1} &= \frac{u}{u^3-1} - \frac{\alpha}{u-1} \\ &= \frac{-(u-1)}{3(u^2+u+1)} \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} \frac{u}{u^3-1} &= \frac{1}{3} \left(\frac{1}{u-1} - \frac{u-1}{u^2+u+1} \right) \\ &= \frac{1}{3} \left(\frac{1}{u-1} - \frac{1}{2} \frac{2u+1}{u^2+u+1} + \frac{3}{2} \frac{1}{(u+\frac{1}{2})^2 + \frac{3}{4}} \right) \end{aligned}$$

ここで $u + \frac{1}{2} = \frac{\sqrt{3}}{2} \tan \varphi$ とすると

$$\begin{aligned} \int \frac{1}{(u+\frac{1}{2})^2 + \frac{3}{4}} &= \frac{2}{\sqrt{3}} \int d\varphi \\ &= \frac{2}{\sqrt{3}} \arctan \frac{2u+1}{\sqrt{3}} + C \end{aligned}$$

故、

$$\begin{aligned} \int \frac{u}{u^3-1} du &= \frac{1}{3} \left(\int \frac{du}{u-1} - \frac{1}{2} \int \frac{2u+1}{u^2+u+1} du + \frac{3}{2} \int \frac{du}{(u+\frac{1}{2})^2 + \frac{3}{4}} \right) \\ &= \frac{1}{3} \left(\log |u-1| - \frac{1}{2} \log |u^2+u+1| + \sqrt{3} \arctan \frac{2u+1}{\sqrt{3}} \right) + C \end{aligned}$$

7) $t = \tan \frac{x}{2}$ とすると $dt = \frac{dx}{2 \cos^2 \frac{x}{2}} = \frac{1+t^2}{2} dx$ であり、 $\sin x = \sin 2\frac{x}{2} = 2 \cos \frac{x}{2} \sin \frac{x}{2} = 2 \cos^2 \frac{x}{2} \tan \frac{x}{2} = \frac{2t}{1+t^2}$ より

$$\begin{aligned} \int \frac{\sin x}{1 + \sin x} dx &= \int \left(1 - \frac{1}{1 + \sin x} \right) dx \\ &= x - 2 \int \frac{1}{1 + \frac{2t}{1+t^2}} \frac{dt}{1+t^2} \\ &= x - 2 \int \frac{1}{(1+t)^2} d(1+t) \\ &= x + \frac{2}{1+t} + C \\ &= x + \frac{2}{1 + \tan \frac{x}{2}} + C \end{aligned}$$

8)

$$\begin{aligned} \int \frac{dx}{x + \sqrt{x^2 - 1}} &= \int \frac{x - \sqrt{x^2 - 1}}{x^2 - (x^2 - 1)} dx \\ &= \int (x - \sqrt{x^2 - 1}) dx \end{aligned}$$

$x = 1/\cos t$ とすると

$$\begin{aligned} \int \sqrt{x^2 - 1} dx &= \int \sqrt{\frac{1}{\cos^2 t} - 1} \frac{\sin t}{\cos^2 t} dt \\ &= \int \left(\frac{1}{\cos^2 t} - 1 \right) \frac{\cos t}{\cos^2 t} dt \end{aligned}$$

$s = \sin t$ として

$$\begin{aligned} \int \left(\frac{1}{\cos^2 t} - 1 \right) \frac{\cos t}{\cos^2 t} dt &= \int \left(\frac{1}{1-s^2} - 1 \right) \frac{1}{1-s^2} ds \\ &= \int \frac{ds}{(1-s)^2(1+s)^2} - \int \frac{ds}{(1-s)(1+s)} \end{aligned}$$

9) $x = \tan t$ とすると

$$\begin{aligned} \int \operatorname{Arctan} x dx &= \int t(\tan t)' dt \\ &= t \tan t - \int \tan t dt \\ &= t \tan t + \frac{1}{2} \int \frac{-2 \sin t}{1 - \sin^2 t} d(\sin t) \\ &= t \tan t + \frac{1}{2} \log |1 - \sin^2 t| + C \\ &= x \operatorname{Arctan} x + \frac{1}{2} \log |1 - (\sin \operatorname{Arctan} x)^2| + C \end{aligned}$$

10)

$$\begin{aligned} \int \frac{1+x^2}{1-x^2} \frac{1}{\sqrt{1+x+x^2}} dx &= \int \left(\frac{1}{1-x} + \frac{1}{1+x} - 1 \right) \frac{1}{\sqrt{1+x+x^2}} dx \\ &= \int \frac{dx}{(x+1)\sqrt{1+x+x^2}} - \int \frac{dx}{(x-1)\sqrt{1+x+x^2}} - \int \frac{1}{\sqrt{1+x+x^2}} dx \end{aligned}$$

ここで第 3 項の積分は 1) で $p = \frac{1}{2}$, $q = 1$ の場合である。他の 2 項について、 $t = 1/(x - a)$ ($a \in \mathbb{R}$) とすると $x = \frac{1}{t} + a$ より

$$\begin{aligned} \int \frac{dx}{(x-a)\sqrt{1+x+x^2}} &= - \int \frac{t}{\sqrt{1 + \left(\frac{1}{t} + a\right) + \left(\frac{1}{t} + a\right)^2 t^2}} \frac{dt}{t^2} \\ &= - \int \frac{dt}{\sqrt{t^2 + (1+at)t + (1+at)^2}} \\ &= - \int \frac{dt}{\sqrt{(a^2 + a + 1)t^2 + (2a+1)t + 1}} \\ &= - \frac{1}{\sqrt{a^2 + a + 1}} \int \frac{dt}{\sqrt{t^2 + \frac{2a+1}{a^2+a+1}t + \frac{1}{a^2+a+1}}} \end{aligned}$$

となるから、 $a = \pm 1$ とすれば 1) より求まる。

問 8.2

1)

$$\begin{aligned} \int_0^1 |D\ell_1(t)| dt &= \int_0^1 \left| \frac{\pi}{2} \cos \frac{\pi}{2} t \right| dt \\ &= \int_0^1 \frac{\pi}{2} \cos \frac{\pi}{2} t dt \\ &= [\ell_1(t)]_0^1 \\ &= 1 \end{aligned}$$

ℓ と ℓ_1 により定まる直線はいずれも $0 \rightarrow 1$ の直線。

2)

$$\begin{aligned} \int_0^1 |D\ell_2(t)| dt &= \int_0^1 \left| -\pi \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right| dt \\ &= 2\pi \int_{\frac{1}{2}}^1 \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) dt \\ &= 2 \left[-\cos \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right]_{1/2}^1 \\ &= 2 \left(-\cos \frac{\pi}{2} + \cos 0 \right) \\ &= 2 \end{aligned}$$

ℓ_2 により定まる直線は $0 \rightarrow 1 \rightarrow 0$ であり ℓ により定まる直線を辿った後逆に戻る。

3) 微積分学の基本定理から直ちに計算でき不自然なので $\int_0^s \left| \frac{d\ell_2}{dt}(t) \right| dt$ の事であると考えられる。

$$\int_0^s |D\ell_2(t)| dt = \int_0^s \left| -\pi \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right| dt$$

$s \leq \frac{1}{2}$ ならば

$$\begin{aligned} \int_0^s \left| -\pi \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right| dt &= -\pi \int_0^s \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) dt \\ &= \left[\cos \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right]_0^s \\ &= \cos \left(\left(s - \frac{1}{2} \right) \pi \right) - \cos \left(-\frac{\pi}{2} \right) \end{aligned}$$

$$= \cos \left(\left(s - \frac{1}{2} \right) \pi \right)$$

$s \geq \frac{1}{2}$ ならば

$$\begin{aligned} \int_0^s \left| -\pi \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right| dt &= -\pi \int_0^{\frac{1}{2}} \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) dt + \pi \int_{\frac{1}{2}}^s \sin \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) dt \\ &= 1 - \left[\cos \left(\left(t - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \right]_{\frac{1}{2}}^s \\ &= 2 - \cos \left(\left(s - \frac{1}{2} \right) \pi \right) \end{aligned}$$

よって

$$\int_0^s |Dl_2(t)| dt = \begin{cases} \cos \left(\left(s - \frac{1}{2} \right) \pi \right) & s \leq \frac{1}{2} \\ 2 - \cos \left(\left(s - \frac{1}{2} \right) \pi \right) & s \geq \frac{1}{2} \end{cases}$$

4) $Dl_3(t)$ が $[a_1, b_1], \dots, [a_n, b_n] \in [0, 1]$ で $Dl_3(t) \geq 0$ 、それ以外の領域で $Dl_3(t) < 0$ を満たすとする、 $b_0 = 0, a_{n+1} = 1$ として

$$\begin{aligned} L(\ell_3) &= \sum_{i=1}^n \int_{a_i}^{b_i} |Dl_3(t)| dt + \sum_{i=0}^n \int_{b_i}^{a_{i+1}} |Dl_3(t)| dt \\ &\geq \sum_{i=1}^n \int_{a_i}^{b_i} Dl_3(t) dt + \sum_{i=0}^n \int_{b_i}^{a_{i+1}} Dl_3(t) dt \\ &= \int_0^1 Dl_3(t) dt \\ &= 1 \end{aligned}$$

ここで

$$\ell_3(t) = \frac{1}{2} \{1 - \cos((2n+1)\pi t)\}$$

とすると ℓ_3 は条件を満たし、 $L(\ell_3) = n$ となる。

問 8.3

以下 $((x, y)) = (\min\{x, y\}, \max\{x, y\})$ とする。

1) $0 < \varphi(a) < 1$ と仮定すると、 $(\alpha, \beta) = ((\psi(0), \psi(1)))$ と置いた時 $a < \alpha$ であり、中間値の定理から $c \in (\alpha, \beta)$ で $\varphi(c) = \varphi(a)$ を満たすものが存在する。ところが φ は逆写像を持つ事から単射でなければならず矛盾。よって $\varphi(a) = 0$ または $\varphi(a) = 1$ である。

2)

$$\begin{aligned} \psi \circ \varphi(t) &= t \\ D\psi \circ \varphi(t) \cdot D\varphi(t) &= 1 \end{aligned}$$

$D\varphi(t) = 0$ とすると左辺は必ず 0 になり矛盾する。よって $D\varphi(t_0) \neq 0$ なる $t_0 \in [a, b]$ は存在しない。

$\varphi(a) = 0$ とすると、任意の $\epsilon > 0$ に対し $\delta > 0$ が存在して、 $x - a < \delta$ の時

$$\left| \frac{\varphi(x) - \varphi(a)}{x - a} - D\varphi(a) \right| < \epsilon$$

が成り立つ。この時

$$\frac{\varphi(x) - \varphi(a)}{x - a} < D\varphi(a) + \epsilon$$

が成り立つから

$$D\varphi(a) \geq \frac{\varphi(x) - \varphi(a)}{x - a} > 0$$

であり、上より $\forall t \in [a, b]$, $D\varphi(t) > 0$ となる。 $\varphi(a) = 1$ の場合も同様。

3) 2) より $\varphi(a) = 0 \Leftarrow \varphi(b) = 0$ 及び $\varphi(a) = 1 \Leftarrow \varphi(b) = 0$ が成り立つので

$$\begin{aligned} L_\varphi &= \int_a^b |D(l \circ \varphi)(t)| dt \\ &= \int_a^b |Dl \circ \varphi(t) D\varphi(t)| dt \\ &= \begin{cases} \int_a^b |Dl \circ \varphi(t)| D\varphi(t) dt & \varphi(a) = 0 \\ \int_b^a |Dl \circ \varphi(t)| D\varphi(t) dt & \varphi(a) = 1 \end{cases} \\ &= \int_0^1 |Dl \circ \varphi(u)| du \quad (u = \varphi(t)) \\ &= L \end{aligned}$$

4) 前問 4) を参照。

5) $DL(t) = \|D\ell(t)\| > 0$ より L は狭義単調増加なので、 $[0, 1]$ から I への全単射写像であり、 L^{-1} が存在して微分可能である。また $D(L^{-1}) = 1/(DL \circ L^{-1})$ であり L は C^1 級かつ $DL \neq 0$ なので $D(L^{-1})$ も連続。

6)

$$\begin{aligned} \|D\ell'(s)\| &= \|D\ell \circ \rho(s) D\rho(s)\| \\ &= \|D\ell \circ \rho(s)\| \frac{1}{\|D\ell \circ \rho(s)\|} \\ &= 1 \end{aligned}$$

7) $\int_0^s \|D\ell'(s')\| ds' = s$ より s は ℓ' の長さそのものである。

$$\begin{aligned} \left(\frac{dh_1}{dt}(t), \frac{dh_2}{dt}(t) \right) &= \frac{d\ell}{dt}(\varphi(t)) \frac{d\varphi}{dt}(t) \\ &= \left(\frac{d\ell_1}{dt}(\varphi(t)), \frac{d\ell_2}{dt}(\varphi(t)) \right) \frac{d\varphi}{dt}(t) \\ &= (f(\varphi(t)), g(\varphi(t))) \frac{d\varphi}{dt}(t) \end{aligned}$$

よって

$$\begin{cases} \frac{d}{dt} h_1(t) = f \circ \varphi(t) \frac{d}{dt} \varphi(t) \\ \frac{d}{dt} h_2(t) = g \circ \varphi(t) \frac{d}{dt} \varphi(t) \end{cases}$$

問 8.4

1)

$$\begin{aligned}
D\varphi &= \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial r}(r \cos \theta) & \frac{\partial}{\partial \theta}(r \cos \theta) \\ \frac{\partial}{\partial r}(r \sin \theta) & \frac{\partial}{\partial \theta}(r \sin \theta) \end{pmatrix} \\
&= \begin{pmatrix} \cos \theta & -r \sin \theta \\ \sin \theta & r \cos \theta \end{pmatrix} \\
\det D\varphi &= r \cos^2 \theta + r \sin^2 \theta \\
&= r
\end{aligned}$$

また

$$\begin{aligned}
\frac{\partial}{\partial x} &= \frac{\partial r}{\partial x} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\partial \theta}{\partial x} \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= \left(\frac{\partial}{\partial x} \sqrt{x^2 + y^2} \right) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{\partial}{\partial x} \arctan \frac{y}{x} \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= \frac{x}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \left(-\frac{y}{x^2} \cos^2 \arctan \frac{y}{x} \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= (\cos \theta) \frac{\partial}{\partial r} - \left(\frac{1}{r} \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
\frac{\partial}{\partial y} &= \frac{\partial r}{\partial y} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\partial \theta}{\partial y} \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= \left(\frac{\partial}{\partial y} \sqrt{x^2 + y^2} \right) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{\partial}{\partial y} \arctan \frac{y}{x} \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= \frac{y}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{1}{x} \cos^2 \arctan \frac{y}{x} \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= (\sin \theta) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{1}{r} \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta}
\end{aligned}$$

なので

$$\begin{aligned}
\frac{\partial^2}{\partial x^2} &= \left[(\cos \theta) \frac{\partial}{\partial r} - \left(\frac{1}{r} \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \right]^2 \\
&= (\cos \theta) \frac{\partial}{\partial r} (\cos \theta) \frac{\partial}{\partial r} - (\cos \theta) \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{1}{r} \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} - \left(\frac{1}{r} \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} (\cos \theta) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{1}{r} \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\frac{1}{r} \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= (\cos \theta)^2 \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \left(\frac{1}{r^2} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} - \left(\frac{1}{r} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r} \sin^2 \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \\
&\quad - \left(\frac{1}{r} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{1}{r^2} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r^2} \sin^2 \theta \right) \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} \\
&= (\cos \theta)^2 \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \left(\frac{1}{r} \sin^2 \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} - \left(\frac{2}{r} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{2}{r^2} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r^2} \sin^2 \theta \right) \frac{\partial^2}{\partial \theta^2}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
\frac{\partial^2}{\partial y^2} &= \left[(\sin \theta) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{1}{r} \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \right]^2 \\
&= (\sin \theta) \frac{\partial}{\partial r} (\sin \theta) \frac{\partial}{\partial r} + (\sin \theta) \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{1}{r} \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r} \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{1}{r} \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\frac{1}{r} \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \\
&= (\sin \theta)^2 \frac{\partial^2}{\partial r^2} - \left(\frac{1}{r^2} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r} \cos^2 \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \\
&\quad + \left(\frac{1}{r} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} \frac{\partial}{\partial r} - \left(\frac{1}{r^2} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r^2} \cos^2 \theta \right) \frac{\partial^2}{\partial \theta^2}
\end{aligned}$$

$$= (\sin \theta)^2 \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \left(\frac{1}{r} \cos^2 \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{2}{r} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \left(\frac{2}{r^2} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r^2} \cos^2 \theta \right) \frac{\partial^2}{\partial \theta^2}$$

以上より

$$\begin{aligned} \Delta &= \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \\ &= (\cos \theta)^2 \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \left(\frac{1}{r} \sin^2 \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} - \left(\frac{2}{r} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{2}{r^2} \cos \theta \sin \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r^2} \sin^2 \theta \right) \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} \\ &\quad + (\sin \theta)^2 \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \left(\frac{1}{r} \cos^2 \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} + \left(\frac{2}{r} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \left(\frac{2}{r^2} \sin \theta \cos \theta \right) \frac{\partial}{\partial \theta} + \left(\frac{1}{r^2} \cos^2 \theta \right) \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} \\ &= \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} \end{aligned}$$

2) 問題の φ は極座標になっていないし $\det D\varphi \equiv 0$ なので、 φ の第 3 要素は $r \sin \theta$ の誤りと考えられる。この時

$$\begin{aligned} D\varphi(r, \theta, \psi) &= \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial r}(r \cos \theta \cos \psi) & \frac{\partial}{\partial \theta}(r \cos \theta \cos \psi) & \frac{\partial}{\partial \psi}(r \cos \theta \cos \psi) \\ \frac{\partial}{\partial r}(r \cos \theta \sin \psi) & \frac{\partial}{\partial \theta}(r \cos \theta \sin \psi) & \frac{\partial}{\partial \psi}(r \cos \theta \sin \psi) \\ \frac{\partial}{\partial r}(r \sin \theta) & \frac{\partial}{\partial \theta}(r \sin \theta) & \frac{\partial}{\partial \psi}(r \sin \theta) \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos \theta \cos \psi & -r \sin \theta \cos \psi & -r \cos \theta \sin \psi \\ \cos \theta \sin \psi & -r \sin \theta \sin \psi & r \cos \theta \cos \psi \\ \sin \theta & r \cos \theta & 0 \end{pmatrix} \\ \det D\varphi(r, \theta, \psi) &= \sin \theta (-r \sin \theta \cos \psi \cdot r \cos \theta \cos \psi - r \cos \theta \sin \psi \cdot r \sin \theta \sin \psi) \\ &\quad - r \cos \theta (\cos \theta \cos \psi \cdot r \cos \theta \cos \psi + r \cos \theta \sin \psi \cdot \cos \theta \sin \psi) \\ &= -r^2 \cos \theta \sin^2 \theta (\cos^2 \psi + \sin^2 \psi) - r^2 \cos^3 \theta (\cos^2 \psi + \sin^2 \psi) \\ &= -r^2 \cos \theta (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) \\ &= -r^2 \cos \theta \end{aligned}$$

第 9 回

問 9.1

1)

$$\int_S dx dy = \int_{x^2+y^2 \leq 1} dx dy - \int_{4x^2+9y^2 < 1} dx dy$$

$S(a, b) = \int_{x^2/a^2+y^2/b^2 \leq 1} dx dy$ とすると

$$\begin{aligned} S(a, b) &= \int_{-a}^a \int_{-b\sqrt{1-x^2/a^2}}^{b\sqrt{1-x^2/a^2}} dy dx \\ &= 2b \int_{-a}^a \sqrt{1 - \frac{x^2}{a^2}} dx \end{aligned}$$

$x = a \cos \varphi$ とすると

$$\begin{aligned} 2b \int_{-a}^a \sqrt{1 - \frac{x^2}{a^2}} dx &= 2b \int_{\pi}^0 \sqrt{1 - \cos^2 \varphi} (-a \sin \varphi) d\varphi \\ &= 2ab \int_0^{\pi} \sin^2 \varphi d\varphi \\ &= 2ab \int_0^{\pi} \frac{1 - \cos 2\varphi}{2} d\varphi \\ &= ab \left[\varphi - \frac{1}{2} \sin 2\varphi \right]_0^{\pi} \\ &= \pi ab \end{aligned}$$

よって

$$\begin{aligned} \int_S dx dy &= S(1, 1) - S\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{3}\right) \\ &= \pi - \frac{1}{6}\pi \\ &= \frac{5}{6}\pi \end{aligned}$$

2)

$$\begin{aligned} \int_{x^2/a^2+y^2/b^2 < 1} (x+y) dx dy &= \int_{-a}^a \int_{-b\sqrt{1-x^2/a^2}}^{b\sqrt{1-x^2/a^2}} (x+y) dy dx \\ &= \int_{-a}^a \left[xy + \frac{1}{2}y^2 \right]_{-b\sqrt{1-x^2/a^2}}^{b\sqrt{1-x^2/a^2}} dx \\ &= 2b \int_{-a}^a x \sqrt{1 - \frac{x^2}{a^2}} dx \end{aligned}$$

$u = \sqrt{1 - x^2/a^2}$ とすると

$$\begin{aligned} 2b \int_{-a}^a x \sqrt{1 - \frac{x^2}{a^2}} dx &= 2b \int_0^1 (-a\sqrt{1-u^2}) u \left(a \frac{-u}{\sqrt{1-u^2}} \right) du + 2b \int_1^0 a\sqrt{1-u^2} \cdot u \left(-a \frac{-u}{\sqrt{1-u^2}} \right) du \\ &= 2a^2b \int_0^1 u^2 du - 2a^2b \int_0^1 u^2 du \\ &= 0 \end{aligned}$$

3) $C \in \mathbb{R}$ を

$$C = \max_{k \in \{1, \dots, r\}} |f(p_k) - g(p_k)|$$

と定めると、任意の $x \in P$ に対し $|f(x) - g(x)| \leq C$ が成り立つ。

ここで任意の $\epsilon > 0$ に対し、 Δ を $\delta(\Delta) < \epsilon/(rC)$ なる P の分割とし $\mathcal{I}(\Delta) = \{I_1, \dots, I_{k(\Delta)}\}$ とする。 $k \in \{1, \dots, k(\Delta)\}$ の内、 I_k が p_1, \dots, p_r の何れかか 1 つ以上を含むものを $\{k_1, \dots, k_l\}$ とする。点が複数の I_k に同時に含まれる事は無いから、 $l \leq r$ が成り立つ。

$\{k_1, \dots, k_l\}$ に含まれない任意の k について $\forall x \in I_k, f(x) = g(x)$ となるから、任意の代表点 $\{\xi_k\}$ について

$$\begin{aligned} s(f - g; \Delta; \xi) &= \sum_{k=1}^{k(\Delta)} (f(\xi_k) - g(\xi_k))v(I_k) \\ &= \sum_{i=1}^l (f(\xi_{k_i}) - g(\xi_{k_i}))v(I_{k_i}) \\ &< \sum_{i=1}^l C \frac{\epsilon}{rC} \\ &= \frac{l}{r} \epsilon \\ &\leq \epsilon \end{aligned}$$

より

$$\lim_{\delta(\Delta) \rightarrow 0} s(f - g; \Delta; \xi) = \int_P (f(x) - g(x))dx = 0$$

が成り立つので $f - g$ は P 上可積分。よって $g = f - (f - g)$ も P 上可積分であり、

$$\int_P g(x)dx = \int_P f(x)dx$$

が成り立つ。

4) $C \in \mathbb{R}$ を

$$C = \max \{ |f(x) - g(x)| \mid \exists t \in [0, 1] \text{ s.t. } l(t) = x \}$$

と定めると、任意の $x \in P$ に対し $|f(x) - g(x)| \leq C$ が成り立つ。又 $D\ell$ は $[0, 1]$ で連続なので、或る $L > 0$ が存在して任意の $t \in [0, 1]$ に対し $\|D\ell(t)\| \leq L$ が成り立つ。

$J_i = \left[\frac{k}{N}, \frac{i+1}{N} \right]$ と置いて $[0, 1]$ を $\{J_i\}_{i=0}^{N-1}$ に分割する。この時、任意の $t \in J_i$ について $\left\| \ell(t) - \ell\left(\frac{i}{N}\right) \right\| \leq \frac{L}{N}$ が成り立つから、 $K_i = \left[\ell\left(\frac{i}{N}\right) - \frac{L}{N}, \ell\left(\frac{i}{N}\right) + \frac{L}{N} \right]$ とした時

$$\sum_{i=0}^{N-1} v(K_i) = N \left(\frac{2L}{N} \right)^2 = \frac{(2L)^2}{N}$$

が成り立つ。

ここで K_i の各辺を延長した P の分割 Δ を考える。即ち、任意の K_i について $K_i = \bigcup_{I \in X} I$ なる $X \subset \mathcal{I}(\Delta)$ が存在するとする。 K_i の定義より $\delta(\Delta) \leq 2\sqrt{2}L/N$ である。 $\mathcal{I}(\Delta)$ について $k \in \{1, \dots, k(\Delta)\}$ の内、 I_k が K_i の何れかに含まれるものを $\{k_1, \dots, k_l\}$ とする。

$\{k_1, \dots, k_l\}$ に含まれない任意の k について $\forall x \in I_k, f(x) = g(x)$ となるから、任意の代表点 $\{\xi_k\}$ について

$$\begin{aligned} s(f - g; \Delta; \xi) &= \sum_{k=1}^{k(\Delta)} (f(\xi_k) - g(\xi_k))v(I_k) \\ &= \sum_{i=1}^l (f(\xi_{k_i}) - g(\xi_{k_i}))v(I_{k_i}) \\ &\leq \sum_{i=1}^l C v(I_{k_i}) \\ &\leq C \frac{(2L)^2}{N} \end{aligned}$$

ここで N は任意であり、 C, L は N に依らない定数なので、 $N \rightarrow \infty$ とすると $\delta(\Delta) \rightarrow 0$ であり

$$\lim_{\delta(\Delta) \rightarrow 0} s(f - g; \Delta; \xi) = \int_P (f(x) - g(x))dx = 0$$

が成り立つので $f - g$ は P 上可積分。よって $g = f - (f - g)$ も P 上可積分であり、

$$\int_P g(x)dx = \int_P f(x)dx$$

が成り立つ。

問 9.2

1)

$$Df(t) = \frac{e^t - e^{-t}}{2}$$

となるので

$$\begin{aligned} L(s) &= \int_0^s \sqrt{1 + \left(\frac{e^t - e^{-t}}{2}\right)^2} dt \\ &= \int_0^s \sqrt{1 + \frac{e^{2t} - 2 + e^{-2t}}{4}} dt \\ &= \int_0^s \sqrt{\left(\frac{e^t + e^{-t}}{2}\right)^2} dt \\ &= \int_0^s \frac{e^t + e^{-t}}{2} dt \\ &= \frac{1}{2} [e^t - e^{-t}]_0^s \\ &= \frac{e^s - e^{-s}}{2} \\ &= \sinh s \end{aligned}$$

2) $u = \sqrt{2}(t - \frac{1}{2})$ と置くと

$$Df(t) = -\sqrt{2} \frac{u}{\sqrt{1 - u^2}}$$

となるので

$$\begin{aligned} L(s) &= \int_{-1/\sqrt{2}}^{\sqrt{2}(s-1/2)} \sqrt{1 + \left(-\sqrt{2} \frac{u}{\sqrt{1 - u^2}}\right)^2} \frac{du}{\sqrt{2}} \\ &= \frac{1}{\sqrt{2}} \int_{-1/\sqrt{2}}^{\sqrt{2}(s-1/2)} \sqrt{\frac{1 + u^2}{1 - u^2}} du \end{aligned}$$

これは $k = i$ の第二種楕円積分である。

問 9.3

- 1) 略
2)

$$\begin{aligned}\det D\Phi(r, \theta) &= \begin{vmatrix} \frac{d}{dr}r \cos \theta & \frac{d}{d\theta}r \cos \theta \\ \frac{d}{dr}r \sin \theta & \frac{d}{d\theta}r \sin \theta \end{vmatrix} \\ &= \begin{vmatrix} \cos \theta & -r \sin \theta \\ \sin \theta & r \cos \theta \end{vmatrix} \\ &= r\end{aligned}$$

なので

$$\begin{aligned}\int_S dx dy &= \int_{-\pi/4}^{\pi/4} \int_1^2 r dr d\theta \\ &= \int_{-\pi/4}^{\pi/4} \left[\frac{1}{2} r^2 \right]_1^2 d\theta \\ &= \frac{3}{2} [\theta]_{-\pi/4}^{\pi/4} \\ &= \frac{3}{4} \pi\end{aligned}$$

- 3)

$$\begin{aligned}\det D\Psi(r, \theta) &= \begin{vmatrix} \cos \varphi \cos \theta & -r \cos \varphi \sin \theta & -r \sin \varphi \cos \theta \\ \cos \varphi \sin \theta & r \cos \varphi \cos \theta & -r \sin \varphi \sin \theta \\ \sin \varphi & 0 & r \cos \varphi \end{vmatrix} \\ &= \sin \varphi \begin{vmatrix} -r \cos \varphi \sin \theta & -r \sin \varphi \cos \theta \\ r \cos \varphi \cos \theta & -r \sin \varphi \sin \theta \end{vmatrix} + r \cos \varphi \begin{vmatrix} \cos \varphi \cos \theta & -r \cos \varphi \sin \theta \\ \cos \varphi \sin \theta & r \cos \varphi \cos \theta \end{vmatrix} \\ &= r^2 \cos \varphi \sin^2 \varphi + r^2 \cos^3 \varphi \\ &= r^2 \cos \varphi\end{aligned}$$

なので

$$\begin{aligned}F(r) &= \int_{-\pi/2}^{\pi/2} \int_0^{2\pi} \int_0^r r'^2 \cos \varphi dr' d\theta d\varphi \\ &= \frac{1}{3} r^3 \int_{-\pi/2}^{\pi/2} \int_0^{2\pi} \cos \varphi d\theta d\varphi \\ &= \frac{2}{3} \pi r^3 \int_{-\pi/2}^{\pi/2} \cos \varphi d\varphi \\ &= \frac{2}{3} \pi r^3 [\sin \varphi]_{-\pi/2}^{\pi/2} \\ &= \frac{2}{3} \pi r^3 [\sin \varphi]_{-\pi/2}^{\pi/2} \\ &= \frac{4}{3} \pi r^3 \\ \frac{dF}{dr}(r) &= 4\pi r^2\end{aligned}$$

問 9.4

- 1) S は $0, v, w$ を頂点とする三角形を成す。

2)

$$A = \begin{pmatrix} v_1 & w_1 \\ v_2 & w_2 \\ v_3 & w_3 \end{pmatrix}$$

とすると

$$\begin{aligned} {}^tAA &= \begin{pmatrix} v_1 & v_2 & v_3 \\ w_1 & w_2 & w_3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v_1 & w_1 \\ v_2 & w_2 \\ v_3 & w_3 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} v^2 & v \cdot w \\ w \cdot v & w^2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

ここで v と w の成す角を θ とすると

$$\begin{aligned} v(S) &= \sqrt{v^2w^2 - (v \cdot w)^2} \\ &= \sqrt{v^2w^2 - v^2w^2 \cos^2 \theta} \\ &= \sqrt{v^2w^2 \sin^2 \theta} \\ &= |v \times w| \end{aligned}$$

と平行四辺形の面積になっちゃいますね？

問 9.5

$$\begin{aligned} DF(x, y) &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \\ D_1f & D_2f \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \\ 2x \sinh(x^2 + y^2) & 2y \sinh(x^2 + y^2) \end{pmatrix} \end{aligned}$$

$s = \sinh(x^2 + y^2)$ として

$$\begin{aligned} {}^tDF(x, y)DF(x, y) &= \begin{pmatrix} 1 & 0 & 2xs \\ 0 & 1 & 2ys \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \\ 2xs & 2ys \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1 + 4x^2s^2 & 4xys^2 \\ 4xys^2 & 1 + 4y^2s^2 \end{pmatrix} \\ |{}^tDF(x, y)DF(x, y)| &= (1 + 4x^2s^2)(1 + 4y^2s^2) - (4xys^2)^2 \\ &= 1 + 4(x^2 + y^2)s^2 \end{aligned}$$

よって

$$S(\Sigma) = \int_{x^2+y^2 \leq 1} \sqrt{1 + 4(x^2 + y^2) \sinh^2(x^2 + y^2)} dx dy$$

極座標変換より

$$\begin{aligned} \int_{x^2+y^2 \leq 1} \sqrt{1 + 4(x^2 + y^2) \sinh^2(x^2 + y^2)} dx dy &= \int_0^{2\pi} \int_0^1 \sqrt{1 + 4r^2 \sinh^2 r^2} r dr d\theta \\ &= 2\pi \int_0^1 \sqrt{1 + 4r^2 \sinh^2 r^2} r dr \end{aligned}$$

多分無理？

第 10 回

問 10.1

1) $(x, y) = t(\pi, 0) + s(\pi, \pi)$ より $(t, s) = \frac{1}{\pi}(x - y, y)$ なので、

$$\begin{aligned}s &\geq 0 \Rightarrow y \geq 0 \\ t &\geq 0 \Rightarrow x \geq y \geq 0 \\ t + s &\leq 1 \Rightarrow x \leq \pi\end{aligned}$$

より $D = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x \leq \pi, 0 \leq y \leq x\}$ 、或いは $D = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq y \leq \pi, y \leq x \leq \pi\}$ となる。

2)

$$\int_D \frac{y \sin x}{x} dx dy = \int_0^\pi \int_0^x \frac{y \sin x}{x} dy dx = \int_0^\pi \int_y^\pi \frac{y \sin x}{x} dx dy$$

3)

$$\begin{aligned}\int_0^\pi \int_0^x \frac{y \sin x}{x} dy dx &= \int_0^\pi \frac{\sin x}{x} \left[\frac{1}{2} y^2 \right]_0^x dx \\ &= \frac{1}{2} \int_0^\pi x \sin x dx \\ &= \frac{1}{2} \int_0^\pi x (-\cos)' dx \\ &= -\frac{1}{2} [x \cos x]_0^\pi + \frac{1}{2} \int_0^\pi \cos x dx \\ &= -\frac{1}{2} (-\pi - 0) + \frac{1}{2} [\sin x]_0^\pi \\ &= \frac{\pi}{2}\end{aligned}$$

問 10.2

1) $k = -1$ は半球、 $k = 0$ は円盤、 $k = 1$ は z^2 的な

2)

$$DF(x, y) = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \\ kx/\sqrt{1+k(x^2+y^2)} & ky/\sqrt{1+k(x^2+y^2)} \end{pmatrix}$$

より

$$\begin{aligned}\det {}^t DF(x, y) DF(x, y) &= \begin{vmatrix} 1 + \frac{k^2 x^2}{1+k(x^2+y^2)} & \frac{k^2 xy}{1+k(x^2+y^2)} \\ \frac{k^2 xy}{1+k(x^2+y^2)} & 1 + \frac{k^2 y^2}{1+k(x^2+y^2)} \end{vmatrix} \\ &= \left(1 + \frac{k^2 x^2}{1+k(x^2+y^2)}\right) \left(1 + \frac{k^2 y^2}{1+k(x^2+y^2)}\right) - \left(\frac{k^2 xy}{1+k(x^2+y^2)}\right)^2 \\ &= 1 + \frac{k^2(x^2+y^2)}{1+k(x^2+y^2)} \\ &= 1 + k - \frac{k}{1+k(x^2+y^2)}\end{aligned}$$

となるから

$$A(k; R) = \int_{x^2+y^2 \leq R} \sqrt{1 + k - \frac{k}{1+k(x^2+y^2)}} dx dy$$

極座標変換より

$$\begin{aligned}\int_{x^2+y^2 \leq R} \sqrt{1+k-\frac{k}{1+k(x^2+y^2)}} dx dy &= \int_0^{\sqrt{R}} \int_0^{2\pi} \sqrt{1+k-\frac{k}{1+kr^2}} r d\theta dr \\ &= 2\pi \int_0^{\sqrt{R}} \sqrt{1+k-\frac{k}{1+kr^2}} r dr\end{aligned}$$

$k=0$ の場合は

$$A(0; R) = 2\pi \int_0^{\sqrt{R}} r dr = \pi R$$

$k \neq 0$ の場合、 $u^2 = 1+k-k/(1+kr^2)$ とすると $2u du = k^2 r dr / (1+kr^2)^2 = (1+k-u^2)^2 r dr$ より

$$\begin{aligned}2\pi \int_0^{\sqrt{R}} \sqrt{1+k-\frac{k}{1+kr^2}} r dr &= 4\pi \int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \frac{u^2}{(1+k-u^2)^2} du \\ &= \pi \int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \left(\frac{1}{\sqrt{1+k}-u} - \frac{1}{\sqrt{1+k}+u} \right)^2 du \\ &= \pi \int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \left(\frac{1}{(u-\sqrt{1+k})^2} - \frac{2}{1+k-u^2} + \frac{1}{(u+\sqrt{1+k})^2} \right) du\end{aligned}$$

ここで $t = u \pm \sqrt{1+k}$ とすると

$$\begin{aligned}\int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \frac{1}{(u \pm \sqrt{1+k})^2} du &= \int_{1 \pm \sqrt{1+k}}^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} \pm \sqrt{1+k}} \frac{1}{t^2} dt \\ &= \left[-\frac{1}{t} \right]_{1 \pm \sqrt{1+k}}^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} \pm \sqrt{1+k}} \\ &= \frac{1}{1 \pm \sqrt{1+k}} - \frac{1}{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} \pm \sqrt{1+k}} \\ &= \frac{1 \mp \sqrt{1+k}}{1 - (1+k)} - \frac{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} \mp \sqrt{1+k}}{(1+\frac{k^2 R}{1+kR}) - (1+k)} \\ &= -\frac{1 \mp \sqrt{1+k}}{k} + (1+kR) \left(\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} \mp \sqrt{1+k} \right)\end{aligned}$$

となる（複合同順）ので

$$\int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \left(\frac{1}{(u-\sqrt{1+k})^2} + \frac{1}{(u+\sqrt{1+k})^2} \right) du = 2\sqrt{(1+kR)(1+kR+k^2R)} - \frac{2}{k}$$

又、

$$\begin{aligned}2 \int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \frac{1}{1+k-u^2} du &= \frac{1}{\sqrt{1+k}} \int_1^{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}}} \left(\frac{1}{u+\sqrt{1+k}} - \frac{1}{u-\sqrt{1+k}} \right) du \\ &= \frac{1}{\sqrt{1+k}} \log \left| \frac{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} + \sqrt{1+k}}{\sqrt{1+\frac{k^2 R}{1+kR}} - \sqrt{1+k}} \right| \\ &= \frac{1}{\sqrt{1+k}} \log \left| \frac{\sqrt{1+kR+k^2R} + \sqrt{(1+k)(1+kR)}}{\sqrt{1+kR+k^2R} - \sqrt{(1+k)(1+kR)}} \right|\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{\sqrt{1+k}} \log \left| \frac{\left(\sqrt{1+kR+k^2R} + \sqrt{(1+k)(1+kR)} \right)^2}{1+kR+k^2R - (1+k)(1+kR)} \right| \\
&= \frac{2}{\sqrt{1+k}} \log \left| \sqrt{1+kR+k^2R} + \sqrt{(1+k)(1+kR)} \right| - \frac{1}{\sqrt{1+k}} \log |k|
\end{aligned}$$

以上より

$$A(k; R) = \begin{cases} \pi \left(\frac{1}{\sqrt{1+k}} \log |k| - \frac{2}{\sqrt{1+k}} \log \left| \sqrt{1+kR+k^2R} + \sqrt{(1+k)(1+kR)} \right| \right. \\ \qquad \qquad \qquad \left. + 2\sqrt{(1+kR)(1+kR+k^2R)} - \frac{2}{k} \right) & (k \neq 0) \\ \pi R & (k = 0) \end{cases}$$

となる *4。

3)

$$\begin{aligned}
\frac{\partial}{\partial k} A(k; R) &= 2\pi \int_0^{\sqrt{R}} \frac{\partial}{\partial k} \sqrt{\frac{1+kr^2+k^2r^2}{1+kr^2}} r \, dr \\
&= 2\pi \int_0^{\sqrt{R}} \frac{(1+2k)(1+kr^2) - (1+kr^2+k^2r^2)}{2(1+kr^2)\sqrt{(1+kr^2)(1+kr^2+k^2r^2)}} r^3 \, dr \\
&= 2\pi \int_0^{\sqrt{R}} \frac{(2+kr^2)k}{2(1+kr^2)\sqrt{(1+kr^2)(1+kr^2+k^2r^2)}} r^3 \, dr
\end{aligned}$$

$k > 0$ の場合、被積分関数は正なので $\frac{\partial A}{\partial k} > 0$ であり、 $A(k; R)$ は単調増加する。 $k < 0$ の場合、 $z \in \mathbb{R}$ 故 $1+kR^2 \geq 0$ より $R^2 \leq -1/k$ が言えるから、 $0 \leq r \leq \sqrt{R}$ より

$$\begin{aligned}
r^2 &\leq \sqrt{-\frac{1}{k}} \\
kr^2 &\geq -(-k)\sqrt{-\frac{1}{k}} = -\sqrt{-k} \\
1+kr^2 &\geq 1-\sqrt{-k}
\end{aligned}$$

ここから $-1 < k < 0$ については $\frac{\partial A}{\partial k} < 0$ となる。

以上より、 k について A の増減は下表のようになる。

k	-1	...	0	...	1
$\frac{\partial A}{\partial k}$		-	0	+	
A		\searrow	min	\nearrow	

問 10.3

1) 極座標変換から

$$\begin{aligned}
S(R) &= \int_D (R) e^{-r^2} r \, dr d\theta \\
&= \int_0^{\sqrt{R}} \int_0^{2\pi} e^{-r^2} r \, d\theta dr \\
&= 2\pi \int_0^{\sqrt{R}} e^{-r^2} r \, dr \\
&= \pi \int_0^R e^{-s} ds \quad (s = r^2)
\end{aligned}$$

*4 $k \rightarrow -1$ で半球の表面積になるし、多分合ってるんじゃないかなあ。

ここで任意の $0 < v < w$ について

$$\begin{aligned} \left| \int_v^w e^{-s} ds \right| &= -[e^{-s}]_v^w \\ &= e^{-v} - e^{-w} \\ &< e^{-v} \end{aligned}$$

これは $v \rightarrow +\infty$ の時 $e^{-v} \rightarrow 0$ 故コーシーの収束条件を満たし、この広義積分は収束する。

2)

$$\begin{aligned} \lim_{R \rightarrow \infty} S(R) &= \pi \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^R e^{-s} ds \\ &= \pi \lim_{R \rightarrow \infty} [-e^{-s}]_0^R \\ &= \pi \lim_{R \rightarrow \infty} (1 - e^{-R}) \\ &= \pi \end{aligned}$$

3) 任意の $1 < v < w$ について

$$\begin{aligned} \left| \int_v^w e^{-x^2} dx \right| &= \int_v^w e^{-x^2} dx \\ &< \int_v^w e^{-x} dx \\ &= [-e^{-x}]_v^w \\ &= e^{-v} - e^{-w} \\ &< e^{-v} \end{aligned}$$

これは $v \rightarrow +\infty$ の時 $e^{-v} \rightarrow 0$ 故コーシーの収束条件を満たし、この広義積分は収束する。

4)

$$\begin{aligned} \int_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy &= \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} \int_{-\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R-x^2}} e^{-(x^2+y^2)} dy dx \\ &= \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} e^{-x^2} \int_{-\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R-x^2}} e^{-y^2} dy dx \end{aligned}$$

ここで任意の R' について

$$\int_{-\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R-x^2}} e^{-y^2} dy = \int_{-R'}^{R'} e^{-y^2} dy - 2 \int_{\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R}} e^{-y^2} dy - 2 \int_{\sqrt{R}}^{R'} e^{-y^2} dy$$

となるから、 $R' \rightarrow \infty$ とすると

$$\int_{-\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R-x^2}} e^{-y^2} dy = \int_{\mathbb{R}} e^{-y^2} dy - 2 \int_{\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R}} e^{-y^2} dy - 2 \lim_{R' \rightarrow \infty} \int_{\sqrt{R}}^{R'} e^{-y^2} dy$$

が成り立つ。ここで $F(t) = \int_0^t e^{-x^2} dx$ と置くと、

$$\begin{aligned} \int_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy &= \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} e^{-x^2} \left(\int_{\mathbb{R}} e^{-y^2} dy - 2 \int_{\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R}} e^{-y^2} dy - 2 \lim_{R' \rightarrow \infty} \int_{\sqrt{R}}^{R'} e^{-y^2} dy \right) dx \\ &= \left(\int_{\mathbb{R}} e^{-x^2} dx \right)^2 - 2 \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} e^{-x^2} \int_{\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R}} e^{-y^2} dy dx \\ &\quad - 2 \left(\int_{\mathbb{R}} e^{-x^2} dx \right) \lim_{R \rightarrow \infty} \left(\lim_{R' \rightarrow \infty} F(R') - F(\sqrt{R}) \right) \end{aligned}$$

ここで

$$\begin{aligned}\int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} e^{-x^2} \int_{\sqrt{R-x^2}}^{\sqrt{R}} e^{-y^2} dy dx &< \int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} e^{-x^2} e^{-(R-x^2)} dx \\ &= \int_{-\sqrt{R}}^{\sqrt{R}} e^{-R} dx \\ &= 2\sqrt{R}e^{-R} \rightarrow 0 \quad (R \rightarrow \infty)\end{aligned}$$

及び

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \left(\lim_{R' \rightarrow \infty} F(R') - F(\sqrt{R}) \right) = \left(\lim_{R' \rightarrow \infty} F(R') - \lim_{R \rightarrow \infty} F(\sqrt{R}) \right) = 0$$

より

$$\int_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy = \left(\int_{\mathbb{R}} e^{-x^2} dx \right)^2$$

が成り立つ。よって

$$\int_{\mathbb{R}} e^{-x^2} dx = \sqrt{\int_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy} = \sqrt{\pi}$$

問 10.4

1) 線型性・対称性は積分の性質から直ちに従う。

$$\langle f | f \rangle = \int_{-1}^1 |f(x)|^2 dx \geq 0$$

より正値性が分かり、等号が成立するのは $f(x) \equiv 0$ の時のみである。

2) $p_{a,b}(x) = \frac{d^b}{dx^b}(x^2-1)^a$ と置くと

$$\begin{aligned}\langle P_m | P_n \rangle &= \int_{-1}^1 \left(\frac{1}{2^m m!} \sqrt{\frac{2m+1}{2}} p_{m,m}(x) \right) \left(\frac{1}{2^n n!} \sqrt{\frac{2n+1}{2}} p_{n,n}(x) \right) dx \\ &= \frac{\sqrt{(2m+1)(2n+1)}}{2 \cdot 2^{m+n} m! n!} \int_{-1}^1 p_{m,m}(x) p_{n,n}(x) dx\end{aligned}$$

ここで部分積分より

$$\begin{aligned}\int_{-1}^1 p_{m,m}(x) p_{n,n}(x) dx &= \int_{-1}^1 p_{m,m}(x) \frac{d}{dx} p_{n,n-1}(x) dx \\ &= [p_{m,m}(x) p_{n,n-1}(x)]_{-1}^1 - \int_{-1}^1 p_{m,m+1}(x) p_{n,n-1}(x) dx\end{aligned}$$

$p_{a,b}(x)$ は $a > b$ の時 (x^2-1) で割り切れるので、任意の $n \geq 0$ に対し右辺第 1 項は 0 となり

$$\begin{aligned}\int_{-1}^1 p_{m,m}(x) p_{n,n}(x) dx &= - \int_{-1}^1 p_{m,m+1}(x) p_{n,n-1}(x) dx \\ &= \dots \\ &= (-1)^n \int_{-1}^1 p_{m,m+n}(x) p_{n,0}(x) dx \\ &= (-1)^n \int_{-1}^1 p_{m,m+n}(x) (x^2-1)^n dx\end{aligned}$$

$p_{m,0}(x)$ は x について $2m$ 次式なので、 $m > n$ とすると $p_{m,m+n}(x) = 0$ が成り立つから右辺は 0 に等しい。又 m, n は交換可能なので $m < n$ の場合も 0 となる。 $m = n$ とすると、

$$(-1)^n \int_{-1}^1 p_{n,2n}(x) (x^2-1)^n dx = (-1)^n (2n)! \int_{-1}^1 (x^2-1)^n dx$$

更に部分積分より

$$\begin{aligned}
 \int_{-1}^1 \left(\frac{d}{dx} x \right) (x^2 - 1)^n dx &= [x(x^2 - 1)^n]_{-1}^1 - 2n \int_{-1}^1 x^2 (x^2 - 1)^{n-1} dx \\
 &= -2n \int_{-1}^1 \left(\frac{d}{dx} \frac{1}{3} x^3 \right) (x^2 - 1)^{n-1} dx \\
 &= \dots \\
 &= (-1)^n 2^n n! \frac{1}{(2n-1)!!} \int_{-1}^1 x^{2n} dx \\
 &= (-1)^n 2^n n! \frac{(2n)!!}{(2n)!} \left[\frac{1}{2n+1} x^{2n+1} \right]_{-1}^1 \\
 &= (-1)^n 2^n n! \frac{2^n n!}{(2n)!} \frac{2}{2n+1} \\
 &= (-1)^n \frac{1}{(2n)!} \frac{2(2^n n!)^2}{2n+1}
 \end{aligned}$$

よって

$$\begin{aligned}
 \langle P_n | P_n \rangle &= \frac{2n+1}{2(2^n n!)^2} \int_{-1}^1 p_{n,n}(x) p_{n,n}(x) dx \\
 &= 1
 \end{aligned}$$

が成り立つから、以上より

$$\langle P_m | P_n \rangle = \delta_{m,n}$$

故に $\{P_n\}_{n=1,2,\dots}$ は正規直交系を成す。

3) 無限次元の空間 V に無限個の直交ベクトルなんだから基底なんじゃないの? *5

*5 ちゃんと完全性を証明するのは少し手間っぽい。N.N.Lebedev “Special Functions & Their Applications” の 4.7 など参照。(ここでドヤる)

第 11 回

問 11.1

- 1) $[a, b]$ について示す。 f は $[a, b]$ 上可積分なので有界であり、或る $C > 0$ が存在して任意の $x \in [a, b]$ に対し $|f(x)| < C$ となる。すると任意の $c \in [a, b]$ に対し

$$\left| \int_{[a, c]} f(x) dx - \int_{[a, b]} f(x) dx \right| = \left| \int_c^b f(x) dx \right| < C(b - c)$$

であり、任意の ϵ について $c > b - \epsilon/C$ なる c を取ると

$$\left| \int_{[a, c]} f(x) dx - \int_{[a, b]} f(x) dx \right| < \epsilon$$

が成り立つ。よって f は $[a, b]$ 上広義可積分であり $\int_{[a, b]} f(x) dx = \int_{[a, b]} f(x) dx$ 。 $\int_{(b, a]} f(x) dx = -\int_{[a, b]} f(x) dx$ より $(a, b]$, (a, b) についても示される。

- 2) 任意の $c \in (a, b)$ について $\int_{(a, b)} = \int_{(a, c]} + \int_{[c, b)}$ なので、1) より従う。

問 11.2

f, g は $[a, b]$ 上有界なので、或る $C > 0$ が存在して任意の $x \in [a, b]$ に対し $|(\lambda f + \mu g)(x)| < C$ となる。ここで任意の $\epsilon > 0$ に対し、 $\delta > 0$ を $\delta < \epsilon/C$ となる様にとれば、 $b - \delta < s \leq t < b$ なる任意の s, t に対し

$$\left| \int_s^t (\lambda f + \mu g)(x) dx \right| < C\delta < \epsilon$$

が成り立つ。よって $\lambda f + \mu g$ は $[a, b]$ 上広義可積分で、積分と極限の線型性から $\int_{[a, b]} (\lambda f + \mu g) = \lambda \int_{[a, b]} f + \mu \int_{[a, b]} g$ となる。

問 11.3

f は連続なので、任意の $\epsilon_1 > 0$ に対して $\delta_1 > 0$ が存在し、

$$\forall x, y \in [a, b], |x - y| < \delta_1 \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon_1$$

が成り立つ。ここで $a_k = a + (k/n)(b - a)$ とし $(b - a)/n < \delta_1$ となる n を取ると、任意の $x \in [a_k, a_{k+1})$ に対して

$$|f(x) - f(a_k)| < \epsilon_1$$

より、 $t_k = f(a_k)$ とすると

$$|f(x) - g(x)| < \epsilon_1$$

となる。一方、任意の $\epsilon_2 > 0$ に対して

$$\sup_{x \in [a, b]} |f(x) - g(x)| - \epsilon_2 < |f(x) - g(x)| \leq \sup_{x \in [a, b]} |f(x) - g(x)|$$

なので、

$$\sup_{x \in [a, b]} |f(x) - g(x)| < \epsilon_1 + \epsilon_2$$

ϵ_1, ϵ_2 はそれぞれ任意なので、任意の $\epsilon > 0$ に対して $\epsilon = \epsilon_1 + \epsilon_2$ となるよう定めればよい。

問 11.4

- 1) 任意の $\epsilon > 0$ に対して f_n の連続性から $\delta > 0$ が存在して $\forall x, y \in [a, b], |x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon$ が成り立ち、また f の条件から $N > 0$ が存在して $n \geq N \Rightarrow \forall x \in [a, b], |f_n(x) - f(x)| < \epsilon$ が各々成り立つ。ここで

$$\begin{aligned} |f_n(x) - f(x)| &= |f_n(x) - f_n(x+h) + f_n(x+h) - f(x)| \\ &= |f_n(x) - f_n(x+h) + f_n(x+h) - f(x+h) + f(x+h) - f(x)| \\ &\geq |f(x+h) - f(x)| - |f_n(x+h) - f_n(x)| - |f_n(x+h) - f(x+h)| \end{aligned}$$

より

$$|f(x+h) - f(x)| \leq 3\epsilon$$

故に f は連続。

2) 条件より任意の $\epsilon > 0$ に対し $N > 0$ が存在して、 $n \geq N$ ならば

$$\forall x \in [a, b], |f_n(x) - f(x)| < \epsilon$$

が成り立つ。この時

$$\begin{aligned} f(x) - \epsilon &< f_n(x) < f(x) + \epsilon \\ \int_a^b f(x) dx - \epsilon(b-a) &< \int_a^b f_n(x) dx < \int_a^b f(x) dx + \epsilon(b-a) \end{aligned}$$

より

$$\left| \int_a^b f_n(x) dx - \int_a^b f(x) dx \right| < \epsilon(b-a)$$

である。よって

$$\lim_{n \rightarrow +\infty} \int_a^b f_n(x) dx = \int_a^b f(x) dx$$

問 11.5

任意の $x \in \mathbb{R}$ に対し $[x] = \begin{cases} [x] & (x \geq 0) \\ \lceil x \rceil & (x < 0) \end{cases}$ とする。 $m = \left\lfloor a / \frac{2\pi}{\lambda} \right\rfloor$, $n = \left\lfloor b / \frac{2\pi}{\lambda} \right\rfloor$ とし、 $a_k = \frac{2\pi k}{\lambda}$ ($m \leq k \leq n$)

と置く。 f の連続性より、任意の $\epsilon' > 0$ に対し $\delta > 0$ が存在して

$$|x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon'$$

が成り立つ。 λ を $2\pi/\lambda < \delta$ となる様にとれば、任意の $x \in [a_k, a_{k+1}]$ ($m \leq k < n$) に対し

$$\begin{aligned} |f(x) - f(a_k)| &< \epsilon' \\ f(a_k) - \epsilon' &< f(x) < f(a_k) + \epsilon' \end{aligned}$$

となるから

$$\begin{aligned} \int_{a_k}^{a_{k+1}} f(a_k) \sin \lambda x dx - \frac{2\pi}{\lambda} \epsilon' &< \int_{a_k}^{a_{k+1}} f(x) \sin \lambda x dx < \int_{a_k}^{a_{k+1}} f(a_k) \sin \lambda x dx + \frac{2\pi}{\lambda} \epsilon' \\ -\frac{2\pi}{\lambda} \epsilon' &< \int_{a_k}^{a_{k+1}} f(x) \sin \lambda x dx < \frac{2\pi}{\lambda} \epsilon' \end{aligned}$$

各区間について和すれば

$$\left| \int_{a_m}^{a_n} f(x) \sin \lambda x dx \right| < \frac{2\pi}{\lambda} (n - m) \epsilon'$$

又 f は閉区間上連続なので有界であり、或る $C > 0$ が存在して任意の $x \in [a, b]$ に対して $|f(x)| < C$ が成り立つ。

故に

$$\left| \int_a^{a_m} f(x) \sin \lambda x dx \right| < \frac{2\pi}{\lambda} C, \quad \left| \int_{a_n}^b f(x) \sin \lambda x dx \right| < \frac{2\pi}{\lambda} C$$

以上より、特に $\epsilon' = 1$ とすれば

$$\left| \int_a^b f(x) \sin \lambda x dx \right| < \frac{2\pi}{\lambda} (n - m + 2C)$$

よって、任意の $\epsilon > 0$ に対して $L \geq 2\pi(n - m + 2C)/\epsilon$ とすれば

$$\lambda > L \Rightarrow \left| \int_a^b f(x) \sin \lambda x \, dx \right| < \epsilon$$

が成り立つ。即ち

$$\lim_{\lambda \rightarrow +\infty} \int_a^b f(x) \sin \lambda x \, dx = 0$$

問 11.6

1) $x \in [0, \pi]$ 故 $x \neq 0$ ならば $\sin \frac{x}{2} \neq 0$ であり g は連続。 *l'Hospital* の定理より

$$\begin{aligned} \lim_{x \rightarrow +0} g(x) &= \lim_{x \rightarrow +0} \frac{2 \sin \frac{x}{2} - x}{x \sin \frac{x}{2}} \\ &= \lim_{x \rightarrow +0} \frac{\cos \frac{x}{2} - 1}{\sin \frac{x}{2} + \frac{x}{2} \cos \frac{x}{2}} \\ &= \lim_{x \rightarrow +0} \frac{-\sin \frac{x}{2}}{2 \cos \frac{x}{2} - \frac{x}{2} \sin \frac{x}{2}} \\ &= 0 = g(0) \end{aligned}$$

よって g は連続。

2) $x = \frac{2n+1}{2}t$ と置くと

$$\begin{aligned} \int_0^{\frac{2n+1}{2}\pi} \frac{\sin x}{x} \, dx &= \int_0^\pi \frac{\sin \frac{2n+1}{2}t}{t} \, dt \\ &= \frac{1}{2} \int_0^\pi \left(\frac{2}{t} - \frac{1}{\sin \frac{t}{2}} + \frac{1}{\sin \frac{t}{2}} \right) \sin \frac{2n+1}{2}t \, dt \\ &= \frac{1}{2} \int_0^\pi g(t) \sin \frac{2n+1}{2}t \, dt + \int_0^\pi \frac{\sin \frac{2n+1}{2}t}{2 \sin \frac{1}{2}t} \, dt \end{aligned}$$

$n \rightarrow +\infty$ とすると $\frac{2n+1}{2} \rightarrow +\infty$ 故、 *Riemann-Lebesgue* の定理より右辺第一項は 0 に収束する。従って

$$\int_0^{+\infty} \frac{\sin x}{x} \, dx = \lim_{n \rightarrow +\infty} \int_0^{\frac{2n+1}{2}\pi} \frac{\sin x}{x} \, dx = \lim_{n \rightarrow +\infty} \int_0^\pi \frac{\sin \frac{2n+1}{2}t}{2 \sin \frac{1}{2}t} \, dt$$

を得る。

3) 積分できないんですが？

4)

4a) $\delta \neq 0$ ならば $\gamma_{\delta, R_1, R_2}$ の成す閉領域で f は極 $z = 0$ のみを持つので、任意の δ, R_1, R_2 について

$$\int_{\gamma_{\delta, R_1, R_2}} f(z) \, dz = 2\pi i \operatorname{Res}(f; 0)$$

ここで

$$\operatorname{Res}(f; 0) = \lim_{z \rightarrow 0} z f(z) = \lim_{z \rightarrow 0} e^{\sqrt{-1}z} = 1$$

よって

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \int_{\gamma_{\delta, R_1, R_2}} f(z) \, dz = 2\pi i$$

4b) 積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid |z| = \delta, \operatorname{Im} z \leq 0\}$ を γ_0 、積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid |z| = \delta, \operatorname{Im} z \geq 0\}$ を γ'_0 とすると、留数定理から

$$\int_{\gamma_0} f(z)dz + \int_{\gamma'_0} f(z)dz = 2\pi i$$

z を $-z$ に置き換えると

$$\int_{\gamma'_0} f(z)dz = \int_{\gamma_0} f(-z)dz$$

よって

$$\begin{aligned} \int_{\gamma_0} f(z)dz - \int_{\gamma'_0} f(z)dz &= \int_{\gamma_0} \frac{e^{iz} - e^{-iz}}{z} dz \\ &= 2i \int_{\gamma_0} \frac{\sin z}{z} dz \end{aligned}$$

或る固定された $R > 0$ に対し $(\sin z)/z$ は $B_0(R)$ 上正則なので有界であり、或る $C > 0$ が存在して任意の $z \in B_0(R)$ に対し $|(\sin z)/z| < C$ が成り立つ。よって $\delta < R$ とすれば

$$\int_{\gamma_0} \frac{\sin z}{z} dz < \pi \delta C$$

となるから

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \left(\int_{\gamma_0} f(z)dz - \int_{\gamma'_0} f(z)dz \right) = 0$$

が成り立つ。よって

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \int_{\gamma_0} f(z)dz = \pi i$$

積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid \delta \leq \operatorname{Re} z \leq R_1, \operatorname{Im} z = 0\}$ を γ_1 、積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid -R_1 \leq \operatorname{Re} z \leq -\delta, \operatorname{Im} z = 0\}$ を γ_5 とすると

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \operatorname{Im} \int_{\gamma_1} f(z)dz = \int_0^{+\infty} \frac{\sin z}{z} dz$$

また

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \operatorname{Im} \int_{\gamma_5} f(z)dz = \int_{-\infty}^0 \frac{\sin z}{z} dz = \int_0^{+\infty} \frac{\sin z}{z} dz$$

積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid \operatorname{Re} z = R_1, 0 \leq \operatorname{Im} z \leq R_2\}$ を γ_2 、積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid \operatorname{Re} z = -R_1, 0 \leq \operatorname{Im} z \leq R_2\}$ を γ_4 、とすると

$$\begin{aligned} \left| \int_{\gamma_2} f(z)dz \right| &\leq \int_0^{R_2} \frac{e^{-x}}{\sqrt{R_1^2 + x^2}} dx \\ &< \frac{1}{R_1} \int_0^{R_2} e^{-x} dx \\ &= \frac{1}{R_1} (1 - e^{-R_2}) \end{aligned}$$

よって

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \int_{\gamma_2} f(z)dz = 0$$

γ_4 も同様。

積分路 $\{z \in \mathbb{C} \mid -R_1 \leq \operatorname{Re} z \leq R_1, \operatorname{Im} z = R_2\}$ を γ_3 とすると

$$\begin{aligned} \left| \int_{\gamma_3} f(z) dz \right| &\leq \int_{-R_1}^{R_1} \frac{e^{-R_2}}{\sqrt{x^2 + R_2^2}} dx \\ &< \frac{2R_1}{\sqrt{R_1^2 + R_2^2}} e^{-R_2} \end{aligned}$$

よって

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \int_{\gamma_3} f(z) dz = 0$$

以上よりそれぞれの積分の極限は収束する *6 ので、

$$\lim_{\substack{\delta \searrow 0 \\ R_1 \rightarrow +\infty \\ R_2 \rightarrow +\infty}} \operatorname{Im} \int_{\gamma_{\delta, R_1, R_2}} f(z) dz = \pi + 2 \int_0^{+\infty} \frac{\sin z}{z} dz$$

従って前問の結果より

$$\int_0^{+\infty} \frac{\sin z}{z} dz = \frac{\pi}{2}$$

問 11.7

- 1) $\lim_{t \rightarrow +\infty} e^{-t} t^{x+1} = 0$ より、或る $T > 0$ が存在して任意の $t \geq T$ に対し $|e^{-t} t^{x+1}| = (e^{-t} t^{x-1}) / t^{-2} < 1$ が成り立つ。この時、

$$\int_T^{+\infty} |e^{-t} t^{x-1}| dt < \int_T^{+\infty} \frac{1}{t^2} dt$$

となり、右辺は絶対収束するので $\Gamma(x)$ は絶対収束する。

2)

i)

$$\begin{aligned} \Gamma(x+1) &= \int_0^{+\infty} e^{-t} t^x dt \\ &= \int_0^{+\infty} (-e^{-t})' t^x dt \\ &= [-e^{-t} t^x]_0^{+\infty} + x \int_0^{+\infty} e^{-t} t^{x-1} dt \\ &= x \Gamma(x) \end{aligned}$$

ii)

$$\begin{aligned} \Gamma(1) &= \int_0^{+\infty} e^{-t} dt \\ &= [-e^{-t}]_0^{+\infty} \\ &= 1 \end{aligned}$$

$\Gamma(1) = 0!$, $\Gamma(n+1) = n\Gamma(n)$ より帰納的に $\forall n \in \mathbb{N}^+$, $\Gamma(n) = (n-1)!$ となる。

iii) $x, t \in \mathbb{R}^+$ に対し $e^{-t} t^{x-1} > 0$ より $\Gamma(x) > 0$

*6 $\int_0^{+\infty} \frac{\sin x}{x} dx$ の収束性は...

iv) $t = r^2$ とすると

$$\begin{aligned}\Gamma(x) &= \int_0^{+\infty} e^{-r^2} t^{2x-2} \cdot 2r \, dr \\ &= 2 \int_0^{+\infty} e^{-r^2} t^{2x-1} dr\end{aligned}$$

3) $B(x, y)$ が広義積分となるのは $0 < x < 1$ 又は $0 < y < 1$ の場合である。

$0 < x < 1$ の場合について考える。任意に固定した $\alpha \in (0, 1)$ に対し $(1-t)^{y-1}$ は $[0, \alpha]$ 上有界なので、或る $C > 0$ が存在して任意の $t \in [0, \alpha]$ に対し $|(1-t)^{y-1}| < C$ が成り立つ。よって任意の $0 < a \leq b < \alpha$ に対し

$$\begin{aligned}\int_a^b |t^{x-1}(1-t)^{y-1}| \, dt &< C \int_a^b t^{x-1} \, dt \\ &= C \left[\frac{1}{x} t^x \right]_a^b \\ &< \frac{C\alpha^x}{x}\end{aligned}$$

よって任意の $\epsilon > 0$ に対し $\delta > 0$ を $\delta < \alpha$ 且つ $\delta < \left(\frac{x}{C}\epsilon\right)^{1/x}$ なる様にとれば、 $0 < a \leq b < \delta$ に対して

$\int_a^b |t^{x-1}(1-t)^{y-1}| \, dt < \epsilon$ が成り立つ。即ち $t \rightarrow 0$ について広義積分は絶対収束する。 $0 < y < 1$ の場合も同様。

4) $t' = 1 - t$ と置換すると

$$\begin{aligned}B(x, y) &= \int_0^1 t^{x-1}(1-t)^{y-1} \, dt \\ &= - \int_1^0 (1-t')^{x-1} t'^{y-1} \, dt' \\ &= \int_0^1 t'^{y-1}(1-t')^{x-1} \, dt' \\ &= B(y, x)\end{aligned}$$

$t = \sin^2 \theta$ と置換すると

$$\begin{aligned}B(x, y) &= \int_0^{\pi/2} \sin^{2x-2} \theta \cos^{2y-2} \theta \cdot 2 \sin \theta \cos \theta \, d\theta \\ &= 2 \int_0^{\pi/2} \sin^{2x-1} \theta \cos^{2y-1} \theta \, d\theta\end{aligned}$$

5) 2) iv) 及び 4) より

$$\begin{aligned}B(x, y)\Gamma(x+y) &= \left(2 \int_0^{\pi/2} \cos^{2x-1} \theta \sin^{2y-1} \theta \, d\theta\right) \left(2 \int_0^{+\infty} e^{-r^2} r^{2x-1} \, dr\right) \\ &= 4 \int_0^{\pi/2} \int_0^{+\infty} e^{-r^2} r^{2x+2y-1} \cos^{2x-1} \theta \sin^{2y-1} \theta \, dr \, d\theta \\ &= 4 \int_0^{\pi/2} \int_0^{+\infty} e^{-r^2} (r \cos \theta)^{2x-1} (r \sin \theta)^{2y-1} r \, dr \, d\theta\end{aligned}$$

極座標変換より、 $(v, w) = (r \cos \theta, r \sin \theta)$ と置くと

$$\begin{aligned}4 \int_0^{\pi/2} \int_0^{+\infty} e^{-r^2} (r \cos \theta)^{2x-1} (r \sin \theta)^{2y-1} r \, dr \, d\theta &= 4 \int_0^{+\infty} \int_0^{+\infty} e^{-(v^2+w^2)} v^{2x-1} w^{2y-1} \, dv \, dw \\ &= \left(2 \int_0^{+\infty} e^{-v^2} v^{2x-1} \, dv\right) \left(2 \int_0^{+\infty} e^{-w^2} w^{2y-1} \, dw\right) \\ &= \Gamma(x)\Gamma(y)\end{aligned}$$

2) iii) より $\Gamma(x+y) \neq 0$ であるから

$$B(x, y) = \frac{\Gamma(x)\Gamma(y)}{\Gamma(x+y)}$$

となる。

問 11.8

1) $(x, y) \in \overline{W_n}$ とすると $\frac{2}{n} \leq x \leq 1 - \frac{1}{n}$ 且つ $\frac{1}{n} \leq y \leq 1 - \frac{1}{n}$ である。この時 $\frac{2}{n+1} < x < 1 - \frac{1}{n+1}$ 且つ $\frac{1}{n+1} < y < 1 - \frac{1}{n+1}$ なので $(x, y) \in W_{n+1}$ が成り立つ。よって $\overline{W_n} \subset W_{n+1}$ となる。

$$\lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{2}{n} = \lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{1}{n} = 0 \text{ 且つ } \lim_{n \rightarrow +\infty} \left(1 - \frac{1}{n}\right) = 1 \text{ より、任意の } x \in W \text{ に対して或る } n \text{ が存在し } x \in W_n$$

が成り立つ。よって $W \subset \bigcup_{n=4}^{+\infty} W_n$ となる。一方各 W_n は W の部分集合なので $\bigcup_{n=4}^{+\infty} W_n \subset W$ である。よって

$W = \bigcup_{n=4}^{+\infty} W_n$ が成り立つ。 W_n と U_n は互いに区間を取り換えたものだから U_n も同様。

2) $f(x, y) = (x^2 - y^2)/(x^2 + y^2)^2$ と置く。 $f(y, x) = -f(x, y)$ なる反対称性より、

$$V_n = \left\{ (x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid \frac{2}{n} < x < 1 - \frac{1}{n}, \frac{1}{n} < y < \frac{2}{n} \right\}$$

として

$$\int_{\overline{W_n}} f(x, y) dx dy = \int_{V_n} f(x, y) dx dy$$

が成り立つ。すると

$$\begin{aligned} \int_{V_n} f(x, y) dx dy &= \int_{2/n}^{1-1/n} \int_{1/n}^{2/n} \frac{x^2 - y^2}{(x^2 + y^2)^2} dy dx \\ &\leq \int_{2/n}^{1-1/n} \int_{1/n}^{2/n} \frac{x^2}{(x^2)^2} dy dx \\ &= \frac{1}{n} \int_{2/n}^{1-1/n} \frac{1}{x^2} dx \\ &= \frac{1}{n} \left[-\frac{1}{x} \right]_{2/n}^{1-1/n} \\ &= \frac{1}{2} - \frac{1}{n-1} \end{aligned}$$

よって任意の n について

$$\int_{\overline{W_n}} f(x, y) dx dy \leq \frac{1}{2}$$

が成り立つ。

収束性は？

3) $|f(x, y)| \geq 0$ 故、 W_n よりも小さい積分領域を取って

$$\begin{aligned} \int_{\overline{W_n}} |f(x, y)| dx dy &\geq \int_{2/n}^{1-1/n} \int_{2/n}^x \frac{x^2 - y^2}{(x^2 + y^2)^2} dy dx \\ &\geq \int_{2/n}^{1-1/n} \int_{2/n}^x \frac{x^2 - y^2}{(2x^2)^2} dy dx \quad (\because y \leq x) \\ &= \frac{1}{4} \int_{2/n}^{1-1/n} \int_{2/n}^x \left(\frac{1}{x^2} - \frac{y^2}{x^4} \right) dy dx \\ &= \frac{1}{4} \int_{2/n}^{1-1/n} \left\{ \frac{1}{x^2} \left(x - \frac{2}{n} \right) - \frac{1}{3x^4} \left(x^3 - \frac{8}{n^3} \right) \right\} dx \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&\geq \frac{1}{4} \int_{2/n}^{1-1/n} \left(\frac{2}{3} \frac{1}{x} - \frac{2}{n} \frac{1}{x^2} \right) dx \\
&= \frac{1}{4} \left[\frac{2}{3} \log x + \frac{2}{n} \frac{1}{x} \right]_{2/n}^{1-1/n} \\
&= \frac{1}{4} \left\{ \frac{2}{3} \log \frac{n-1}{2} + \frac{2}{n} \left(\frac{n}{n-1} - \frac{n}{2} \right) \right\} \\
&= \frac{1}{6} \log \frac{n-1}{2} + \frac{1}{2} \left(\frac{1}{n-1} - \frac{1}{2} \right)
\end{aligned}$$

これは $n \rightarrow +\infty$ の時発散する。よって

$$\lim_{n \rightarrow +\infty} \int_{W_n} \left| \frac{x^2 - y^2}{(x^2 + y^2)^2} \right| dx dy = +\infty$$

問 11.9

- 1) 定義から $\|(v, w)\|_{(x, y)} = 0 \Leftrightarrow v = w = 0$ (独立性) 及び $\forall a \in \mathbb{R}, \|a(v, w)\|_{(x, y)} = |a| \cdot \|(v, w)\|_{(x, y)}$ (斉次性) が成り立つ。また、相加相乗平均の関係から

$$\begin{aligned}
&(\|(v_1, w_1)\|_{(x, y)} + \|(v_2, w_2)\|_{(x, y)})^2 - (\|(v_1, w_1) + (v_2, w_2)\|_{(x, y)})^2 \\
&= 2 \left(\frac{2}{1 + x^2 + y^2} \right)^2 \left\{ \sqrt{v_1^2 v_2^2 + v_1^2 w_2^2 + v_2^2 w_1^2 + w_1^2 w_2^2} - (v_1 v_2 + w_1 w_2) \right\} \\
&\geq 2 \left(\frac{2}{1 + x^2 + y^2} \right)^2 \left\{ \sqrt{v_1^2 v_2^2 + 2|v_1 v_2 w_1 w_2| + w_1^2 w_2^2} - (v_1 v_2 + w_1 w_2) \right\} \\
&\geq 2 \left(\frac{2}{1 + x^2 + y^2} \right)^2 \{ |v_1 v_2| + |w_1 w_2| - (v_1 v_2 + w_1 w_2) \} \\
&\geq 0
\end{aligned}$$

より劣加法性が成り立つ。

- 2) $Dl_1(t) = \frac{\pi}{4} (-\sin \frac{\pi}{4} t, \cos \frac{\pi}{4} t)$ より

$$\begin{aligned}
L_1 &= \int_0^1 \frac{2}{1 + \cos^2 \frac{\pi}{4} t + \sin^2 \frac{\pi}{4} t} \cdot \frac{\pi}{4} \sqrt{\sin^2 \frac{\pi}{4} t + \cos^2 \frac{\pi}{4} t} dt \\
&= \frac{\pi}{4} \int_0^1 dt \\
&= \frac{\pi}{4}
\end{aligned}$$

$Dl_2(t) = (-1, 1)$ より

$$\begin{aligned}
L_2 &= \int_0^1 \frac{2\sqrt{2}}{1 + (1-t)^2 + t^2} dt \\
&= \sqrt{2} \int_0^1 \frac{1}{(t - \frac{1}{2})^2 + \frac{3}{4}} dt
\end{aligned}$$

$t - \frac{1}{2} = \frac{\sqrt{3}}{2} \tan \varphi$ として

$$\begin{aligned}
\sqrt{2} \int_0^1 \frac{1}{(t - \frac{1}{2})^2 + \frac{3}{4}} dt &= 2\sqrt{\frac{2}{3}} \int_{-\pi/6}^{\pi/6} d\varphi \\
&= \frac{2}{3} \sqrt{\frac{2}{3}} \pi
\end{aligned}$$

$\frac{8}{27} - \frac{1}{16} = \frac{101}{432} > 0$ より $\frac{2}{3} \sqrt{\frac{2}{3}} > \frac{1}{4}$ 。よって $L_1 < L_2$ 。

- 3) $(0, 0, 1) + \alpha \{(t, s, u) - (0, 0, 1)\} = (x, y, 0)$ とすると $(x, y) = f(t, s, u)$ なので、 f は $S^2 \setminus \{(0, 0, 1)\}$ の点を、その点と $(0, 0, 1)$ を結ぶ直線の xy 平面との交点へ対応させる写像である *7。
- 4) 任意の $(x, y) \in \mathbb{R}^2$ について、 $f(t, s, u) = (x, y)$ とすると

$$t^2 + s^2 + u^2 = (x^2 + y^2)(1 - u)^2 + u^2 = 1$$

より

$$u = \frac{1 \pm \sqrt{1 - \left(1 - \frac{1}{(x^2 + y^2)^2}\right)}}{1 + \frac{1}{x^2 + y^2}} = \frac{x^2 + y^2 \pm 1}{x^2 + y^2 + 1}$$

$u \neq 1$ なので

$$u = \frac{x^2 + y^2 - 1}{x^2 + y^2 + 1}$$

又 $1 - u = 2/(1 + x^2 + y^2)$ となるから

$$(t, s, u) = \frac{1}{1 + x^2 + y^2} (2x, 2y, x^2 + y^2 - 1)$$

よって f は全射である。又 $f(t_1, s_1, u_1) = f(t_2, s_2, u_2)$ ならば $t_1 : t_2 = s_1 : s_2 = 1 - u_1 : 1 - u_2$ より、 $\alpha \in \mathbb{R}$ として $(t_2, s_2, 1 - u_2) = \alpha(t_1, s_1, 1 - u_1)$ だが、

$$t_2^2 + s_2^2 + u_2^2 = \alpha^2 t_1^2 + \alpha^2 s_1^2 + \{1 - \alpha(1 - u_1)\}^2 = \alpha^2 + (1 - \alpha)^2 + 2\alpha(1 - \alpha)u_1 = 1$$

が任意の u_1 について恒等式である事から $\alpha = 0, 1$ であり、ここで $\alpha = 0$ は $(t_2, s_2, u_2) \in S^2 \setminus \{(0, 0, 1)\}$ に反する。よって $\alpha = 1$ であり、 f は単射。以上より f は全単射であり、逆写像が存在して

$$f^{-1}(x, y) = \frac{1}{1 + x^2 + y^2} (2x, 2y, x^2 + y^2 - 1)$$

となる。

5)

$$\begin{aligned} Dg(x, y) &= \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \frac{2x}{1 + x^2 + y^2} & \frac{\partial}{\partial y} \frac{2x}{1 + x^2 + y^2} \\ \frac{\partial}{\partial x} \frac{2y}{1 + x^2 + y^2} & \frac{\partial}{\partial y} \frac{2y}{1 + x^2 + y^2} \\ \frac{\partial}{\partial x} \frac{x^2 + y^2 - 1}{1 + x^2 + y^2} & \frac{\partial}{\partial y} \frac{x^2 + y^2 - 1}{1 + x^2 + y^2} \end{pmatrix} \\ &= \frac{2}{(1 + x^2 + y^2)^2} \begin{pmatrix} 1 - x^2 + y^2 & -2xy \\ -2xy & 1 + x^2 - y^2 \\ 2x & 2y \end{pmatrix} \end{aligned}$$

故に

$$\begin{aligned} \|(v, w)\|'_{(x, y)} &= \left\| Dg(x, y) \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \right\|'' \\ &= \frac{2}{(1 + x^2 + y^2)^2} \left\| ((1 - x^2 + y^2)v - 2xyw, -2xyv + (1 + x^2 - y^2)w, 2xv + 2yw) \right\| \\ &= \frac{2}{(1 + x^2 + y^2)^2} \sqrt{(1 + x^2 + y^2)^2 (v^2 + w^2)} \\ &= \|(v, w)\|_{(x, y)} \end{aligned}$$

よって示された。

*7 $(0, 0, 1) \mapsto \infty$ とすると上手い事いくので Riemann 球面と呼ばれる。

第 12 回

問 12.1

a) 1) $f(x) = \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n$ とすると

$$\begin{aligned} D^3 f + D^2 f - Df - f &= \sum_{n=3}^{+\infty} n(n-1)(n-2)a_n x^{n-3} + \sum_{n=2}^{+\infty} n(n-1)a_n x^{n-2} - \sum_{n=1}^{+\infty} n a_n x^{n-1} - \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n \\ &= \sum_{n=0}^{+\infty} \{(n+3)(n+2)(n+1)a_{n+3} + (n+2)(n+1)a_{n+2} - (n+1)a_{n+1} - a_n\} x^n \\ &= 0 \end{aligned}$$

x についての恒等式なので、全ての n について

$$(n+3)(n+2)(n+1)a_{n+3} + (n+2)(n+1)a_{n+2} - (n+1)a_{n+1} - a_n = 0$$

が成り立つ。又 $f(0) = Df(0) = 0$, $D^2 f(0) = 1$ より $a_0 = a_1 = 0$, $a_2 = 1$ 。

ここで $b_n = (n+1)a_{n+1} + a_n$ と置くと、 $b_0 = 0, b_1 = 2$ であり

$$\begin{aligned} (n+2)(n+1)((n+3)a_{n+3} + a_{n+2}) &= (n+1)a_{n+1} + a_n \\ (n+2)(n+1)b_{n+2} &= b_n \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} b_n &= \begin{cases} 0 & (2|n) \\ \frac{2}{n!} & (2 \nmid n) \end{cases} \\ &= \frac{1 - (-1)^n}{2} \frac{1}{n!} \end{aligned}$$

となる。 $c_n = n!a_n$ と置けば $c_0 = c_1 = 0$ で、

$$\begin{aligned} c_{n+1} + c_n &= n!b_n = \frac{1 - (-1)^n}{2} \\ c_{n+2} &= c_n + 2(-1)^n \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} c_n &= \begin{cases} c_0 + n & (2|n) \\ c_1 - (n-1) & (2 \nmid n) \end{cases} \\ &= (-1)^n n + \frac{1 - (-1)^n}{2} \end{aligned}$$

以上から

$$a_n = \frac{(-1)^n}{(n-1)!} + \frac{1 - (-1)^n}{2n!} = \frac{1}{n!} \left\{ \frac{1}{2} + \left(n - \frac{1}{2} \right) (-1)^n \right\}$$

$$\sqrt[n]{|a_n|} = \sqrt[n]{\frac{n}{n!} \left| \frac{1}{2} + \left(n - \frac{1}{2} \right) (-1)^n \right|}$$

ここで

$$\lim_{n \rightarrow +\infty} \left| \frac{\frac{1}{2} + \left(n - \frac{1}{2} \right) (-1)^n}{n} \right| = 1$$

より

$$\limsup_{n \rightarrow +\infty} \sqrt[n]{|a_n|} = \lim_{n \rightarrow +\infty} \sqrt[n]{\frac{1}{(n-1)!}} = 0$$

即ち収束半径は $+\infty$ 。

2) $f(x) = e^{\alpha x}$ とすると

$$\alpha^3 + \alpha^2 - \alpha - 1 = (\alpha + 1)^2(\alpha - 1) = 0$$

より $\alpha = 1, -1$ (重根)。よって

$$f(x) = C_1 e^x + (C_2 + C_3 x) e^{-x}$$

初期条件より $C_1 = 1/4, C_2 = -1/4, C_3 = -1/2$ なので

$$f(x) = \frac{e^x - (2x+1)e^{-x}}{4} = \frac{\sinh x - x e^{-x}}{2}$$

となり、これは *Taylor* 展開すると上の級数解に一致する。

3) x を複素数としても同様である。

b) 1) $f(x) = \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n$ とすると $a_0 = 0$ であり、

$$\{f(x)\}^2 = \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n \sum_{m=0}^{+\infty} a_m x^m = \sum_{n=0}^{+\infty} \sum_{m=0}^{+\infty} a_n a_m x^{n+m} = \sum_{n=0}^{+\infty} \left(\sum_{k=0}^n a_k a_{n-k} \right) x^n$$

よって

$$Df(x) = \sum_{n=0}^{+\infty} (n+1) a_{n+1} x^n = 1 + \sum_{n=0}^{+\infty} \left(\sum_{k=0}^n a_k a_{n-k} \right) x^n$$

即ち $n=0$ の時 $a_1 = 1 + a_0^2 = 1$ であり、任意の $n \geq 1$ については

$$(n+1)a_{n+1} = \sum_{k=0}^n a_k a_{n-k}$$

先ず帰納的に $a_{2n} = 0$ が示せる。

$$a_1 = 1$$

$$a_3 = 1/3$$

$$a_5 = 2/3/5$$

$$a_7 = 17/3/5/3/7$$

$$a_9 = 62/3/5/3/7/9$$

$$a_{11} = 1384/3/5/3/7/9/5/11$$

$$1, \frac{1}{1!! \cdot 3!!}, \frac{2}{1!! \cdot 5!!}, \frac{17}{3!! \cdot 7!!}, \frac{62}{3!! \cdot 9!!}, \frac{1384}{5!! \cdot 11!!}, \dots$$

何ですかねこれは...? *8

2)

$$\frac{1}{1+f^2} \frac{df}{dx} = 1$$

$$\int \frac{df}{1+f^2} = \int dx$$

*8 Bernoulli 数で書けるらしい。下から分かる様に $f(x) = \tan x$ なので $\limsup_{n \rightarrow +\infty} \sqrt[n]{|a_n|} = \frac{2}{\pi}$ の筈だが... (複素解析の定理から収束半径は最も近い特異点までの距離に等しい。) こんなの計算できるの?

$f = \tan \circ g$ とすると

$$\int \frac{df}{1+f^2} = \int \frac{1}{1+\tan^2 \circ g} \frac{dg}{\cos^2 g} = g = \arctan f$$

即ち

$$\begin{aligned}\arctan f(x) &= x + C \\ f(x) &= \tan(x + C)\end{aligned}$$

ここで初期条件より $C = m\pi$ ($m \in \mathbb{Z}$)。よって

$$f(x) = \tan x$$

3) 同様。

c) 1) $(Df)^3 = 27f^2$ で f を N 次多項式とすると、 $3(N-1) = 2N$ より $N = 3$ である。よって $f(x) = a_0 + a_1x + a_2x^2 + a_3x^3$ とすると、 $f(0) = 0$ より $a_0 = 0$ で、

$$\begin{aligned}(Df)^3 &= 27f^2 \\ (a_1 + 2a_2x + 3a_3x^2)^3 &= 27(a_1x + a_2x^2 + a_3x^3)^2\end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned}a_1^3 &= 0 \\ 6a_1^2a_2 &= 0 \\ 3a_1(3a_1a_3 + 4a_2^2) &= 27a_1^2 \\ 4a_2(9a_1a_3 + 2a_2^2) &= 54a_1a_2 \\ 9a_3(3a_1a_3 + 4a_2^2) &= 27(2a_1a_3 + a_2^2) \\ 54a_2a_3^2 &= 54a_2a_3 \\ 27a_3^3 &= 27a_3^2\end{aligned}$$

これを解いて $a_1 = a_2 = 0$ 、及び $a_3 = 0, 1$ を得る。よって

$$f(x) = 0, x^3$$

いずれも $\limsup_{n \rightarrow +\infty} \sqrt[n]{|a_n|} = 0$ より収束半径は $+\infty$ である。

2) $f = 0$ は解である。 $f \neq 0$ の場合

$$\begin{aligned}f^{-2/3} \frac{df}{dx} &= 3 \\ \int f^{-2/3} df &= 3 \int dx \\ 3f^{1/3} &= 3x + C' \\ f(x) &= (x + C)^3\end{aligned}$$

$f(0) = 0$ より

$$f(x) = x^3$$

よって

$$f(x) = 0, x^3$$

3) $z \in \mathbb{C}$ に対して $z^{2/3}$ は多価函数であり、 $\exp\left(\frac{2}{3}\text{Log } z\right)$ の $1, e^{2\pi i/3}, e^{4\pi i/3}$ 倍になる不定性がある。よって分枝に取り方によっては x^3 の $e^{-2\pi i/3}, e^{-4\pi i/3}$ 倍も解であり

$$f(x) = 0, \quad x^3, \quad e^{\frac{2}{3}\pi i}x^3, \quad e^{\frac{4}{3}\pi i}x^3$$

となる。

d) 1) $f(x) = \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n$ として

$$\begin{aligned} \left(\sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n\right) \left(\sum_{n=0}^{+\infty} (n+1)a_{n+1}x^n\right) &= -1 \\ \sum_{m=0}^{+\infty} \sum_{n=0}^{+\infty} (n+1)a_m a_{n+1} x^{m+n} &= -1 \\ \sum_{n=0}^{+\infty} \left(\sum_{k=0}^n (k+1)a_{n-k}a_{k+1}\right) x^n &= -1 \end{aligned}$$

$f(0) = -1$ より $a_0 = -1$ なので、

$$\{a_n\} = \left\{-1, 1, \frac{1}{2}, -\frac{1}{2}, -\frac{5}{8}, -\frac{7}{8}, -\frac{17}{16}, \dots\right\}$$

ここで $n \geq 3$ に対して $a_n = -(2n-3)!!/n!$ が成り立つ。*Stirling* の公式から導かれる（というかそれよりも弱い評価の） $n! \sim n^n$ を用いれば*9

$$\begin{aligned} |a_n| &= \frac{(2n-3)!!}{n!} \\ &= \frac{(2n-3)!}{(2n-2)!! n!} \\ &= \frac{(2n-3)!}{2^{n-1}(n-1)!n!} \\ &= \frac{n}{2n(2n-1)(2n-2)} \frac{(2n)!}{2^{n-1}(n!)^2} \\ &\sim \frac{(2n)^{2n}}{2^{n+2}n^{2n+2}} \\ &= \frac{2^{n-2}}{n^2} \end{aligned}$$

より $\limsup_{n \rightarrow +\infty} \sqrt[n]{|a_n|} = 2$ 故、収束半径は $\frac{1}{2}$ 。

2)

$$\begin{aligned} \int f \, df &= - \int dx \\ \frac{1}{2}f^2 &= -x + C \\ f(x) &= \pm \sqrt{2(-x + C)} \end{aligned}$$

$f(0) = -1$ より

$$f(x) = -\sqrt{1-2x}$$

*9 記号 $f \sim g$ は $\lim(f/g) = 1$ を意味する。

この *Taylor* 展開は 1) の級数と一致する。

3) 平方根による不定性は上の様に初期条件で解消される。

e) 1) $0 = f(0)Df(0) = -1$ ですね？

問 12.2

1) $f(x) = \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n$ とすると

$$Df = \sum_{n=0}^{+\infty} (n+1)a_{n+1}x^n = \alpha \sum_{n=0}^{+\infty} a_n x^n$$

より

$$a_{n+1} = \alpha \frac{a_n}{n+1} = \frac{\alpha^{n+1}}{(n+1)!} a_0 = \frac{\alpha^{n+1}}{(n+1)!} f(0)$$

が成り立つ。よって $f(0)$ を指定すれば級数解が一意に定まる。

$$\sqrt[n]{|a_n|} = \sqrt[n]{\frac{|\alpha|^n}{n!} |f(0)|} = |\alpha| \sqrt[n]{\frac{|f(0)|}{n!}} \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow +\infty)$$

より収束半径は $+\infty$ である。

2) 同様。

3) a) $P \in GL_2(\mathbb{R})$ より P^{-1} が存在して $f = P^{-1}g$ 。すると

$$\begin{aligned} Df &= Af \\ DP^{-1}g &= (AP^{-1})g \\ Dg &= (PAP^{-1})g \quad (\because D \text{ の線型性}) \end{aligned}$$

又 $g(0) = Pf(0) = Pv$ となる。逆も同様。

b)

$$\begin{pmatrix} Df_1 \\ Df_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} f = \begin{pmatrix} 2f_1 \\ f_2 \end{pmatrix}$$

より

$$f(x) = \begin{pmatrix} \alpha e^{2x} \\ \beta e^x \end{pmatrix}$$

$f(0) = (1 \ 1)^T$ より $(\alpha, \beta) = (1, 1)$ 。よって

$$f(x) = \begin{pmatrix} e^{2x} \\ e^x \end{pmatrix}$$

c) $|\lambda I - A| = \lambda^2 - 1 = 0$ とすると $\lambda = \pm 1$ 。

$$A \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_1 & -a_2 \\ b_1 & -b_2 \end{pmatrix}$$

とすると $a_1 = b_1$, $a_2 = -b_2$ なので、固有ベクトルは $(1 \ 1)^T, (1 \ -1)^T$ となり

$$P = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$$

と置くと

$$\begin{aligned} P^{-1}AP &= \frac{1}{-2} \begin{pmatrix} -1 & -1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \\ &= \frac{1}{-2} \begin{pmatrix} -1 & -1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

また

$$g(0) = Pf(0) = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

よって $Dg = (P^{-1}AP)g$ の解は $g = (e^x - e^{-x})^T$ で、

$$f(x) = \frac{1}{-2} \begin{pmatrix} -1 & -1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e^x \\ -e^{-x} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sinh x \\ \cosh x \end{pmatrix}$$

d) $|\lambda I - A| = \lambda^2 + 1 = 0$ とすると $\lambda = \pm i$ 。

$$A \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ia_1 & -ia_2 \\ ib_1 & -ib_2 \end{pmatrix}$$

とすると $a_1 = ib_1$, $a_2 = -ib_2$ なので、固有ベクトルは $(i \ 1)^T, (1 \ i)^T$ となり

$$P = \begin{pmatrix} i & 1 \\ 1 & i \end{pmatrix}$$

と置くと

$$\begin{aligned} P^{-1}AP &= \frac{1}{-2} \begin{pmatrix} i & -1 \\ -1 & i \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} i & 1 \\ 1 & i \end{pmatrix} \\ &= \frac{1}{-2} \begin{pmatrix} -1 & -i \\ i & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} i & 1 \\ 1 & i \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} i & 0 \\ 0 & -i \end{pmatrix} \end{aligned}$$

また

$$g(0) = Pf(0) = \begin{pmatrix} i & 1 \\ 1 & i \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} i \\ 1 \end{pmatrix}$$

よって $Dg = (P^{-1}AP)g$ の解は $g = (e^{ix} \ i e^{-ix})^T$ で、

$$f(x) = \frac{1}{-2} \begin{pmatrix} i & -1 \\ -1 & i \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e^{ix} \\ -i e^{-ix} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos x \\ \sin x \end{pmatrix}$$

問 12.3

以下 $A, B \in M_2(K)$ について $\forall i, j \in \{1, 2\}$, $A_{i,j} < B_{i,j}$ の時 $A < B$ であるとする。

1)

$$A^n = \begin{pmatrix} a_n & c_n \\ c_n & b_n \end{pmatrix}$$

と置き、 $r > 0$ が或る $n \geq 1$ について $a_n, b_n, c_n < 2^{n-1}r^n$ を満たすとする。この時

$$A^{n+1} = \begin{pmatrix} a_1 a_n + c_1 c_n & c_1 a_n + b_1 c_n \\ a_1 c_n + c_1 b_n & b_1 b_n + c_1 c_n \end{pmatrix}$$

より $a_{n+1}, b_{n+1}, c_{n+1} < 2^n r^{n+1}$ が成り立つ。仮定は $n = 0$ について成り立っているので、数学的帰納法により任意の $n \geq 1$ について $a_n, b_n, c_n < 2^{n-1}r^n$ が言える。すると

$$\begin{aligned} \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{1}{n!} (Ax)^n v &< I_2 v + \sum_{n=1}^{+\infty} \frac{1}{n!} 2^{n-1} r^n x^n \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} v \\ &= v + \frac{1}{2} \sum_{n=1}^{+\infty} \frac{1}{n!} (2rx)^n \begin{pmatrix} v_1 + v_2 \\ v_1 + v_2 \end{pmatrix} \\ &= v + \frac{e^{2rx} - 1}{2} \begin{pmatrix} v_1 + v_2 \\ v_1 + v_2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

となり、優級数の方法より $\sum_{n=0}^{+\infty} \frac{1}{n!} (Ax)^n v$ は一様収束する。従って f は項別微分可能であり

$$Df(x) = \sum_{n=1}^{+\infty} \frac{1}{(n-1)!} A^n x^{n-1} v = \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{1}{n!} A^{n+1} x^n v = A \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{1}{n!} A^n x^n v = Af(x)$$

又定義より $f(0) = v$ なので、これは問題の方程式の解となっている。

2)

$$A^n = \begin{pmatrix} a_n & b_n \\ c_n & d_n \end{pmatrix}$$

と置けば前問と同様にして

$$B(x) < I_2 + \frac{e^{2rx} - 1}{2} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix}$$

より、 $B(x)$ は一様収束してその収束半径は $+\infty$ と分かる。

3) 略

4) 略

5) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$ の時、 $A^2 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ より

$$A^n = \begin{cases} A & (2 \nmid n) \\ I & (2 | n) \end{cases}$$

よって

$$\begin{aligned} \exp Ax &= \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{x^{2n}}{(2n)!} I + \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{x^{2n+1}}{(2n+1)!} A \\ &= \frac{e^x + e^{-x}}{2} I + \frac{e^x - e^{-x}}{2} A \\ &= (\cosh x) I + (\sinh x) A \end{aligned}$$

$A = \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$ の時、 $A^2 = -I$ より

$$A^n = \begin{cases} (-1)^{(n-1)/2} A & (2 \nmid n) \\ (-1)^{n/2} I & (2 | n) \end{cases}$$

よって

$$\begin{aligned} \exp Ax &= \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{(-1)^n x^{2n}}{(2n)!} I + \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{(-1)^n x^{2n+1}}{(2n+1)!} A \\ &= (\cos x) I + (\sin x) A \end{aligned}$$

6) 略

問 12.4

1)

$$\begin{aligned} \int_{[0,1] \times [0,1]} D_1 D_2 f(x, y) dx dy &= \int_0^1 \int_0^1 D_1 D_2 f(x, y) dx dy \\ &= \int_0^1 (D_2 f(1, y) - D_2 f(0, y)) dy \\ &= f(1, 1) - f(1, 0) - f(0, 1) + f(0, 0) \end{aligned}$$

2) a)

$$\begin{aligned}
\int_0^1 \frac{\partial f}{\partial y}(1, t) dt + \int_0^1 \frac{\partial f}{\partial y}(0, 1-t) dt &= \int_0^1 \frac{\partial f}{\partial y}(1, t) dt + \int_1^0 \frac{\partial f}{\partial y}(0, 1-t) d(1-t) \\
&= f(1, 1) - f(1, 0) + f(0, 0) - f(0, 1) \\
&= f(1, 1) - f(1, 0) - f(0, 1) + f(0, 0)
\end{aligned}$$

1) と一致する。

b)

$$\begin{aligned}
\int_0^1 \frac{\partial f}{\partial x}(t, 0) dt + \int_0^1 \frac{\partial f}{\partial x}(1-t, 1) dt &= \int_0^1 \frac{\partial f}{\partial x}(t, 0) dt + \int_1^0 \frac{\partial f}{\partial x}(1-t, 1) d(1-t) \\
&= f(1, 0) - f(0, 0) + f(0, 1) - f(1, 1) \\
&= f(1, 0) + f(0, 1) - f(0, 0) - f(1, 1)
\end{aligned}$$

符号が逆。

問 12.5

1) $f_0 \equiv \text{Log}$ かつ f_n 同士の差は定数なので、 $m \geq 1$ に対し f_n の m 階微分は全て一致して Log の m 階微分に等しい。よって

$$D^m f_n(z) = D^m \text{Log } z = (-1)^{m-1} (m-1)! z^{-m} \quad (m \geq 1)$$

より

$$f_n(z) = 2\pi i n + \text{Log } z_0 + \sum_{n=1}^{+\infty} \frac{(-1)^{n-1}}{n z_0^n} (z - z_0)^n$$

となる。ここで

$$\limsup_{n \rightarrow +\infty} \sqrt[n]{\left| \frac{(-1)^{n-1}}{n z_0^n} \right|} = \lim_{n \rightarrow +\infty} \frac{1}{|z_0|} \sqrt[n]{\frac{1}{n}} = \frac{1}{|z_0|}$$

より収束半径は $|z_0|$ である。一方、 $g_0 = \pi i + \text{Log}(-z)$ かつ g_n 同士の差も定数なので

$$g_n(z) = 2\pi i \left(n + \frac{1}{2} \right) + \text{Log}(-z_0) + \sum_{n=1}^{+\infty} \frac{(-1)^{n-1}}{n z_0^n} (z - z_0)^n$$

となり、収束半径は $|z_0|$ である。2) H_1 上で $f_n = g_m$ となる時、 Log の定義域に注意して

$$\begin{aligned}
2\pi i n + \text{Log } z_0 &= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + \text{Log}(-z_0) \\
&= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + \text{Log}(-i) + \text{Log}(-iz_0) \\
2\pi i n &= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + 2\text{Log}(-i) \\
&= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) - \pi i \\
n &= m
\end{aligned}$$

H_2 上では

$$\begin{aligned}
 2\pi in + \operatorname{Log} z_0 &= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + \operatorname{Log}(-z_0) \\
 &= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + \operatorname{Log} i + \operatorname{Log}(iz_0) \\
 2\pi in &= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + 2\operatorname{Log} i \\
 &= 2\pi i \left(m + \frac{1}{2} \right) + \pi i \\
 n &= m + 1
 \end{aligned}$$

3) a) E は幅 2 の Archimedes 螺旋。

b) $D \setminus \{z \in \mathbb{R} \mid z \leq 0\}$ の各連結領域を内側から順に S_0, S_1, \dots とする。即ち、

$$\begin{aligned}
 \ell_0 &= \{z \in \mathbb{C} \mid 0 \leq r \leq 1, z = r^{i\pi}\} \\
 \ell_n &= \{z \in \mathbb{C} \mid 2n-1 \leq r \leq 2n+1, z = r^{i\pi}\}
 \end{aligned}$$

として、 ℓ_0 と負の実軸で囲まれる領域の内部を S_0 、 $n \geq 1$ について ℓ_{n-1}, ℓ_n と負の実軸で囲まれる領域の内部を S_n とする。同様に $E \setminus \{z \in \mathbb{R} \mid z \geq 0\}$ の各連結領域を内側から順に T_0, T_1, \dots とする。

この時 $1 \in S_1$ より、 $f(1) = 0$ なので f は S_1 上 f_0 と一致する。 f_0 は $S_1 \cap T_0$ 上 g_{-1} と一致するので、 f はもし連続ならば T_0 上 g_{-1} と一致する。同様にして任意の S_n, T_n について f が一意に定まるから、 D 全体でも f は一意に定まる。

c) 前問より任意の $z_0 \in D$ に対して或る $n \geq 0$ が存在し、 S_n 又は T_n 上で f_{n-1} 又は g_{n-1} と一致する。1) より f_{n-1}, g_{n-1} は z_0 で Taylor 展開可能なので、 f は D 上解析的である。

d) f が D 全体で単一の冪級数として表されているのならば、 $\lim_{z \rightarrow 2-0} f(z) = \lim_{z \rightarrow 2+0} f(z)$ となる筈である。しかし、

$$\begin{aligned}
 \lim_{z \rightarrow 2-0} f(z) &= \lim_{z \rightarrow 2-0} f_0(z) = \operatorname{Log} 2 \\
 \lim_{z \rightarrow 2+0} f(z) &= \lim_{z \rightarrow 2+0} f_1(z) = \operatorname{Log} 2 + 2\pi i
 \end{aligned}$$

となり矛盾。よって f は D 全体で単一の冪級数として表せない。

問 12.6

1) $f, g \in V$ とすると、連続性より任意の $\epsilon > 0$ について $\delta_1, \delta_2 > 0$ が存在し、任意の $x, y \in \mathbb{R}$ に対して

$$\begin{aligned}
 |x - y| < \delta_1 &\Rightarrow |f(x) - f(y)| < \epsilon \\
 |x - y| < \delta_2 &\Rightarrow |g(x) - g(y)| < \epsilon
 \end{aligned}$$

が共に成り立つ。この時任意の $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$ について

$$\begin{aligned}
 |(\alpha f(x) + \beta g(x)) - (\alpha f(y) + \beta g(y))| &= |\alpha f(x) - \alpha f(y) + \beta g(x) - \beta g(y)| \\
 &\leq |\alpha f(x) - \alpha f(y)| + |\beta g(x) - \beta g(y)| \\
 &= \alpha |f(x) - f(y)| + \beta |g(x) - g(y)|
 \end{aligned}$$

より

$$|x - y| < \min\{\delta_1, \delta_2\} \Rightarrow |(\alpha f(x) + \beta g(x)) - (\alpha f(y) + \beta g(y))| < (\alpha + \beta)\epsilon$$

となる。 ϵ と α, β は独立に決められるから、 $\alpha f + \beta g$ も連続である。よって V は実線型空間である。

2) 略

3) 略

4) a) $f, g \in U$ より或る $M > 0$ が存在して $|x| \geq M$ ならば $f(x) = g(x) = 0$ である。よって

$$\begin{aligned}\int_{-\infty}^{+\infty} f(x)g(x)dx &= \int_{-\infty}^{-M} f(x)g(x)dx + \int_{-M}^M f(x)g(x)dx + \int_M^{\infty} f(x)g(x)dx \\ &= \int_{-M}^M f(x)g(x)dx\end{aligned}$$

5) 略

6) 任意の $a, b \in \mathbb{R}$, $a < b$ に対して $\{f_n\}$ は f に $[a, b]$ 上一様収束するので、任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N > 0$ が存在し、

$$n \geq N \Rightarrow \forall x \in [a, b], |f_n(x) - f(x)| < \frac{\epsilon}{3}$$

が成立する。又各 f_n は連続なので、同じ ϵ に対して或る $\delta > 0$ が存在し、

$$\forall x, y \in \mathbb{R}, |x - y| < \delta \Rightarrow |f(x) - f(y)| < \frac{\epsilon}{3}$$

となる。よって任意の $x, y \in [a, b]$ 及び $n \geq N$ について、 $|x - y| < \delta$ ならば

$$\begin{aligned}|f(x) - f(y)| &= |f(x) - f_n(x) + f_n(x) - f_n(y) + f_n(y) - f(y)| \\ &\leq |f(x) - f_n(x)| + |f_n(x) - f_n(y)| + |f_n(y) - f(y)| \\ &< \epsilon\end{aligned}$$

となり f は $[a, b]$ 上連続である。任意の $x \in \mathbb{R}$ について a, b を $x \in [a, b]$ となる様にとれるので、 f は \mathbb{R} 上連続であり $f \in V$ 。

一方、 $f_n \in U$ を

$$f_n(x) = \begin{cases} 1 - \frac{|x|}{n} & (|x| \leq n) \\ 0 & (|x| \geq n) \end{cases}$$

と定めると $f(x) = 1$ は連続だが $f \notin U$ である。

7) a) $f \in U$ より或る $M > 0$ が存在して $|x| \geq M \Rightarrow f(x) = 0$ である。よって

$$\sup_{x \in \mathbb{R}} |f(x)| = \sup_{x \in [-M, M]} |f(x)|$$

であり、 $|f|$ は有界閉区間 $[-M, M]$ 上連続なので有限の最大値を持つ。よって $\|f\|_\infty$ は有限である。

定義から任意の $f \in U$ について $\|f\|_\infty = 0 \Leftrightarrow f = 0$ (独立性) と $\forall a \in \mathbb{R}, \|af\|_\infty = |a| \|f\|_\infty$ (斉次性) が従う。又 $f, g \in U$ について

$$\begin{aligned}\|f + g\|_\infty &= \sup_{x \in \mathbb{R}} |f(x) + g(x)| \\ &\leq \sup_{x \in \mathbb{R}} (|f(x)| + |g(x)|) \\ &\leq \sup_{x \in \mathbb{R}} |f(x)| + \sup_{x \in \mathbb{R}} |g(x)| \\ &= \|f\|_\infty + \|g\|_\infty\end{aligned}$$

となり劣加法性が成り立つ。よって $\|\cdot\|_\infty$ は U 上のノルムである。

b)

$$f_n = \begin{cases} n - |n^4 x| & (|x| \leq 1/n^3) \\ 0 & (|x| \geq 1/n^3) \end{cases}$$

とすると $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|f\|_{\infty} = +\infty$ だが

$$\begin{aligned}\|f_n\|^2 &= 2 \int_0^{1/n^3} (n - n^4 x)^2 dx \\ &= \frac{2}{n^4} \int_0^n x^2 dx \\ &= \frac{2}{3n}\end{aligned}$$

より $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|f_n\| = 0$ となる。

c)

$$f_n = \begin{cases} \frac{1}{n} - \left| \frac{x}{n^4} \right| & (|x| \leq n^3) \\ 0 & (|x| \geq n^3) \end{cases}$$

とすると $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|f\|_{\infty} = 0$ だが

$$\begin{aligned}\|f_n\|^2 &= 2 \int_0^{n^3} \left(\frac{1}{n} - \frac{x}{n^4} \right)^2 dx \\ &= 2n^4 \int_0^{1/n} x^2 dx \\ &= \frac{2}{3}n\end{aligned}$$

より $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|f_n\| = +\infty$ となる。

問 12.7

1) 略

2) $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|f_n\| = 0$ より任意の $\epsilon > 0$ に対し或る $N > 0$ が存在して、 $n \geq N$ ならば

$$\|f_n\| = \sqrt{\int_0^1 \{(f(x))^2 + (Df(x))^2\} dx} < \epsilon$$

より

$$\sqrt{\int_0^1 (Df(x))^2 dx} < \epsilon$$

が成り立つ。すると任意の $x_0 \in [0, 1]$ について

$$\begin{aligned}f_n(x_0) &= \int_0^{x_0} Df_n(x) dx \\ &\leq \int_0^1 |Df_n(x)| dx \\ &\leq \sqrt{\int_0^1 |Df_n(x)|^2 dx} \\ &< \epsilon\end{aligned}$$

となるから、 $\{f_n\}$ は 0 に $[0, 1]$ 上一様収束する。

3) a) 任意の $f, g \in V$ と $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$ 及び $x \in \mathbb{R}$ について、

$$D(\alpha f + \beta g)(x) = \alpha Df(x) + \beta Dg(x)$$

が成り立つから $^{*10}\varphi(\alpha f + \beta g) = \alpha\varphi f + \beta\varphi g$ となり φ は線型写像である。

b) 2) で示した。

c)

$$f_n(x) = \frac{1}{n\pi} \sin n\pi x$$

とすると

$$\|f_n\|' = \frac{1}{n\pi} \sqrt{\int_0^1 \sin^2 n\pi x \, dx} = \frac{1}{\sqrt{2}n\pi}$$

より $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|f_n\|' = 0$ だが、

$$\begin{aligned} \|Df_n\| &= \sqrt{\int_0^1 (\cos^2 n\pi x + n^2 \pi^2 \sin^2 n\pi x) \, dx} \\ &= \sqrt{\frac{1 + n^2 \pi^2}{2}} \end{aligned}$$

より $\lim_{n \rightarrow +\infty} \|Df_n\| = +\infty$ である。

問 12.13

定義 12.11 の記号を用いて、変数変換公式より

$$\begin{aligned} \int_{\gamma} \omega &= \int_0^1 h \circ \gamma(s) \frac{d\gamma}{ds} ds \\ &= \sum_{i=0}^{k-1} \int_{s_i}^{s_{i+1}} h \circ \gamma_i(s) \frac{d\gamma_i}{ds} ds \\ &= \sum_{i=0}^{k-1} \int_{\gamma_i(s_i)}^{\gamma_i(s_{i+1})} h(t) dt \end{aligned}$$

ここで定義より任意の $0 \leq i \leq k-1$ について $\gamma_i(s_{i+1}) = \gamma(s_{i+1}) = \gamma_{i+1}(s_{i+1})$ が成り立つので

$$\int_{\gamma} \omega = \int_a^b h(t) dt$$

となり、 $\int_{\gamma} \omega$ は γ の選び方に依らず定まる。

問 12.17

$\gamma^* dx$ の定義 *11 より $\gamma^* dx = d\gamma_1$ が、 γ_1 を \mathbb{R} 上 0-形式と看做せば外微分の定義より $d\gamma_1 = \frac{d\gamma_1}{ds} ds$ がそれぞれ成り立つ。 $\gamma^* dy$ についても同様。

問 12.19

定義と前問より

$$\begin{aligned} \gamma^* \omega &= (\gamma^* f) \gamma^* dx + (\gamma^* g) \gamma^* dy \\ &= (f \circ \gamma) d\gamma_1 + (g \circ \gamma) d\gamma_2 \\ &= f \circ \gamma \frac{d\gamma_1}{ds} ds + g \circ \gamma \frac{d\gamma_2}{ds} ds \end{aligned}$$

*10 I 上の関数 f, g について $f = g$ って $\forall x \in I, f(x) = g(x)$ の事なんですかね？

*11 この辺りで $\gamma: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ と書かれているが、恐らくは $\gamma: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$ の誤植。

問 12.20

問題の γ はどう見ても区分的に C^∞ 級の曲線ではない。恐らくは

$$\gamma(s) = \begin{cases} (4s, 1) & 0 \leq s \leq \frac{1}{4} \\ (1, 2 - 4s) & \frac{1}{4} \leq s \leq \frac{1}{2} \\ (3 - 4s, 0) & \frac{1}{2} \leq s \leq \frac{3}{4} \\ (0, 4s - 3) & \frac{3}{4} \leq s \leq 1 \end{cases}$$

という閉曲線を描きたかったのではないだろうか。多分。そういう事にしておく。

1) $(0, 1), (1, 1), (1, 0), (0, 0)$ を頂点とする正方形。

2) γ を自然に $\gamma_a, \gamma_b, \gamma_c, \gamma_d$ へ分割する。この時

$$\int_{\gamma} \omega = \int_{\gamma_a} \omega + \int_{\gamma_b} \omega + \int_{\gamma_c} \omega + \int_{\gamma_d} \omega$$

と書ける。 $\omega = \frac{\partial f}{\partial y} dy$ は定義 12.14 で (f, g) を $(0, D_y f)$ としたものとと言えるので、

$$\begin{aligned} \int_{\gamma} \omega &= \int_0^{1/4} \frac{\partial f}{\partial y} \circ \gamma_a(s) \frac{d\gamma_{a2}}{ds}(s) ds + \int_{1/4}^{1/2} \frac{\partial f}{\partial y} \circ \gamma_b(s) \frac{d\gamma_{b2}}{ds}(s) ds \\ &\quad + \int_{1/2}^{3/4} \frac{\partial f}{\partial y} \circ \gamma_c(s) \frac{d\gamma_{c2}}{ds}(s) ds + \int_{3/4}^1 \frac{\partial f}{\partial y} \circ \gamma_d(s) \frac{d\gamma_{d2}}{ds}(s) ds \\ &= -4 \int_{1/4}^{1/2} \frac{\partial f}{\partial y} \circ \gamma_b(s) ds + 4 \int_{3/4}^1 \frac{\partial f}{\partial y} \circ \gamma_d(s) ds \\ &= -4 \int_{1/4}^{1/2} \frac{\partial f}{\partial y}(1, 2 - 4s) ds + 4 \int_{3/4}^1 \frac{\partial f}{\partial y}(0, 4s - 3) ds \\ &= \int_1^0 \frac{\partial f}{\partial y}(1, t) dt + \int_0^1 \frac{\partial f}{\partial y}(0, t) dt \\ &= f(1, 0) - f(1, 1) + f(0, 1) - f(0, 0) \end{aligned}$$

3)

$$\begin{aligned} \int_{\gamma} \omega &= \int_0^{1/4} \frac{\partial f}{\partial x} \circ \gamma_a(s) \frac{d\gamma_{a1}}{ds}(s) ds + \int_{1/4}^{1/2} \frac{\partial f}{\partial x} \circ \gamma_b(s) \frac{d\gamma_{b1}}{ds}(s) ds \\ &\quad + \int_{1/2}^{3/4} \frac{\partial f}{\partial x} \circ \gamma_c(s) \frac{d\gamma_{c1}}{ds}(s) ds + \int_{3/4}^1 \frac{\partial f}{\partial x} \circ \gamma_d(s) \frac{d\gamma_{d1}}{ds}(s) ds \\ &= 4 \int_0^{1/4} \frac{\partial f}{\partial x} \circ \gamma_a(s) ds - 4 \int_{1/2}^{3/4} \frac{\partial f}{\partial x} \circ \gamma_c(s) ds \\ &= 4 \int_0^{1/4} \frac{\partial f}{\partial x}(4s, 1) ds - 4 \int_{1/2}^{3/4} \frac{\partial f}{\partial x}(3 - 4s, 0) ds \\ &= \int_0^1 \frac{\partial f}{\partial x}(t, 1) dt + \int_1^0 \frac{\partial f}{\partial x}(t, 0) dt \\ &= f(1, 1) - f(0, 1) + f(0, 0) - f(1, 0) \end{aligned}$$

問 12.24

\mathbb{R}^2 上の 0-形式 f に対する外微分 df は定義されていないが、 $df = \frac{\partial f}{\partial x} dx + \frac{\partial f}{\partial y} dy$ とすると上手く行くのでそういう

事にする。

$$\begin{aligned}
 d\omega &= df \wedge dx + dg \wedge dy \\
 &= \left(\frac{\partial f}{\partial x} dx + \frac{\partial f}{\partial y} dy \right) \wedge dx + \left(\frac{\partial f}{\partial x} dx + \frac{\partial f}{\partial y} dy \right) \wedge dy \\
 &= \frac{\partial f}{\partial x} dx \wedge dx + \frac{\partial f}{\partial y} dy \wedge dx + \frac{\partial f}{\partial x} dx \wedge dy + \frac{\partial f}{\partial y} dy \wedge dy \\
 &= -\frac{\partial f}{\partial y} dx \wedge dy + \frac{\partial f}{\partial x} dx \wedge dy \\
 &= \left(-\frac{\partial f}{\partial y} dx + \frac{\partial f}{\partial x} dy \right) \wedge dx \wedge dy
 \end{aligned}$$

問 12.29

定義 12.28 で $g = 1$ (定数関数) としたものと言えるから $g \circ f = 1$ であり、定義 12.21 から

$$\begin{aligned}
 f^*\omega &= df_1 \wedge df_2 \\
 &= \left(\frac{\partial f_1}{\partial x} dx + \frac{\partial f_1}{\partial y} dy \right) \wedge \left(\frac{\partial f_2}{\partial x} dx + \frac{\partial f_2}{\partial y} dy \right) \\
 &= \left(\frac{\partial f_1}{\partial x} \frac{\partial f_2}{\partial y} - \frac{\partial f_1}{\partial y} \frac{\partial f_2}{\partial x} \right) dx \wedge dy \\
 &= (\det Df) dx \wedge dy
 \end{aligned}$$

問 12.30

1)

$$\begin{aligned}
 g \circ f &= \text{id}_{\mathbb{R}^2} \\
 Dg \circ f(x) Df(x) &= I_2 \\
 (\det Dg \circ f(x)) (\det Df(x)) &= 1
 \end{aligned}$$

より $\det Df(x) = 0$ とすると矛盾。よって $\det Df(x) \neq 0$ が成り立つ。

$\det Df(x)$ は \mathbb{R}^2 上連続なので、符号が変わるとすると中間値の定理より $\det Df(x) = 0$ なる x が存在するがこれは矛盾。よって符号は変わらない。

2) $\omega = g dx \wedge dy$ とすると、問 12.29 より $df_1 \wedge df_2 = (\det Df) dx \wedge dy$ なので

$$\begin{aligned}
 \int_{[0,1] \times [0,1]} f^*\omega &= \int_{[0,1] \times [0,1]} (g \circ f) df_1 \wedge df_2 \\
 &= \int_{[0,1] \times [0,1]} (g \circ f) (\det Df) dx \wedge dy \\
 &= \int_{[0,1] \times [0,1]} (g \circ f) (\det Df) dx dy
 \end{aligned}$$

条件より $\det Df = |\det Df|$ なので、変数変換より

$$\begin{aligned}
 \int_{[0,1] \times [0,1]} (g \circ f) (\det Df) dx dy &= \int_{f([0,1] \times [0,1])} g dx' dy' \\
 &= \int_{[0,1] \times [0,1]} g dx dy \\
 &= \int_{[0,1] \times [0,1]} \omega
 \end{aligned}$$

よって

$$\int_{[0,1] \times [0,1]} f^*\omega = \int_{[0,1] \times [0,1]} \omega$$

3) 前問で $\det Df = |\det Df|$ を $\det Df = -|\det Df|$ に置き換えればよい。

第 13 回

問 13.1

- 1) $f \in V$ とすると、或る多項式 P が存在して $\lim_{x \rightarrow +\infty} (f/P)(x) = 0$ が成り立つ。この時任意の $\epsilon > 0$ に対し或る $M > 0$ が存在して、 $x > M$ ならば

$$\left| \frac{f(x)}{P(x)} \right| < \epsilon$$

なので特に $\epsilon = 1$ とすれば $|f(x)| < |P(x)|$ である。よって $f \in V'$ であり、 $V \subset V'$ が成り立つ。

$f \in V'$ とすると、或る多項式 P と $M > 0$ が存在して $x > M \Rightarrow |f(x)| \leq |P(x)|$ が成り立つ。この時 P の次数を n とすると、 $\lim_{x \rightarrow +\infty} |P(x)|/x^{n+1} = 0$ より或る $L > 0$ が存在して $x > L$ ならば

$$|P(x)| \leq x^{n+1}$$

が成り立つ。よって

$$x > \max\{M, L\} \Rightarrow |f(x)| \leq x^{n+1}$$

なので $f \in V''$ であり、 $V' \subset V''$ が成り立つ。

$f \in V''$ とすると、或る $n > 0$ と $M > 0$ が存在して $x > M$ ならば $|f(x)| \leq x^n$ が成り立つ。この時

$$\left| \frac{f(x)}{x^{n+1}} \right| \leq \frac{1}{x}$$

なので、 $\lim_{x \rightarrow +\infty} (1/x) = 0$ より $\lim_{x \rightarrow +\infty} f(x)/x^{n+1} = 0$ である。よって $f \in V$ であり、 $V'' \subset V$ が成り立つ。

以上より $V \subset V' \subset V'' \subset V$ なので $V = V' = V''$ である。

$f, g \in V''$ とすると、或る $n_1, n_2 > 0$ と $M_1, M_2 > 0$ が存在して $x > M_1 \Rightarrow |f(x)| < x^{n_1}$ と $x > M_2 \Rightarrow |g(x)| < x^{n_2}$ がそれぞれ成り立つ。この時、 $m = \max\{n_1, n_2\} + 1$ とすると任意の $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$ について $\lim_{x \rightarrow +\infty} (\alpha x^{n_1} + \beta x^{n_2})/x^m = 0$ より $\alpha f + \beta g \in V''$ が言えるので $V = V' = V''$ は実線型空間である。

- 2) $f \in V = V''$ とすると或る $n > 0$ と $M > 0$ に対して

$$\begin{aligned} \int_0^{+\infty} e^{-tx} f(x) dx &\leq \int_0^{+\infty} e^{-tx} |f(x)| dx \\ &\leq \int_0^M e^{-tx} |f(x)| dx + \int_M^{+\infty} e^{-tx} x^n dx \\ &\leq \frac{1}{t^{n+1}} \Gamma(n+1) + \int_0^M e^{-tx} |f(x)| dx - \int_0^M e^{-tx} x^n dx \end{aligned}$$

問 11.7 1) より右辺は収束するので左辺も収束して $f \in W$ となり、 $V \subset W$ が成り立つ。広義積分の（積分と極限の）線型性から W は実線型空間であり、 V, W は同じ演算について実線型空間を成すから V は W の部分線型空間である。

- 3) 部分積分より

$$\begin{aligned} \mathcal{L}f(t) &= \int_0^{+\infty} e^{-tx} f(x) dx \\ &= -\frac{1}{t} [e^{-tx} f(x)]_0^{+\infty} + \frac{1}{t} \int_0^{+\infty} e^{-tx} Df(x) dx \end{aligned}$$

$\mathcal{L}f$ の収束性より $\lim_{x \rightarrow +\infty} e^{-tx} f(x) = 0$ なので

$$\begin{aligned} \mathcal{L}f(t) &= \frac{1}{t} f(0) + \frac{1}{t} (\mathcal{L}Df)(t) \\ (\mathcal{L}Df)(t) &= -f(0) + t(\mathcal{L}f)(t) \end{aligned}$$

右辺が収束するので左辺も収束し、 $Df \in W$ である。

- 4) $f(x) = \sin x$ とすると f は連続であり、 $\sin x \leq 1$ より $\lim_{x \rightarrow +\infty} f(x)/x = 0$ が成り立つので $f \in V$ である。
又部分積分より

$$\begin{aligned}\mathcal{L}f(t) &= \int_0^{+\infty} e^{-tx} \sin x \, dx \\ &= -\frac{1}{t} [e^{-tx} \sin x]_0^{+\infty} + \frac{1}{t} \int_0^{+\infty} e^{-tx} \cos x \, dx \\ &= -\frac{1}{t^2} [e^{-tx} \cos x]_0^{+\infty} - \frac{1}{t^2} \int_0^{+\infty} e^{-tx} \sin x \, dx \\ &= \frac{1}{t^2} - \frac{1}{t^2} \mathcal{L}f(t) \\ \mathcal{L}f(t) &= \frac{1}{1+t^2}\end{aligned}$$

- 5) 3) より $\mathcal{L}Df, \mathcal{L}D^2f$ は収束するので

$$\begin{aligned}(\mathcal{L} \sin)(t) &= \mathcal{L}(D^2f + 2Df + f)(t) \\ \frac{1}{1+t^2} &= (\mathcal{L}D^2f)(t) + 2(\mathcal{L}Df)(t) + \mathcal{L}f(t) \\ &= -Df(0) + t(\mathcal{L}Df)(t) - 2f(0) + 2t(\mathcal{L}f)(t) + \mathcal{L}f(t) \\ &= (1+t)^2(\mathcal{L}f)(t) - (t+2)f(0) - Df(0) \\ \mathcal{L}f(t) &= \frac{1}{(1+t)^2} \left\{ \frac{1}{1+t^2} + (t+2)f(0) + Df(0) \right\}\end{aligned}$$

- 6) 広義積分の線型性より \mathcal{L} は線型写像である。

問 13.2

- 1) $I = (0, +\infty)$ とする。 $\int_0^{+\infty} e^{-tx} f(x) dx$ は任意の $t \in I$ について収束する。一方

$$\frac{\partial}{\partial t} \left(e^{-tx} \frac{\sin x}{x} \right) (x, t) = -e^{-tx} \sin x$$

は $[0, +\infty) \times I$ 上存在して連続であり、

$$\begin{aligned}\int_0^{+\infty} \frac{\partial}{\partial t} \left(e^{-tx} \frac{\sin x}{x} \right) dx &= - \int_0^{+\infty} e^{-tx} \sin x \, dx \\ &= -\frac{1}{1+t^2}\end{aligned}$$

の収束は任意の閉区間 $[a, b] \subset I$ について一様である。よって

$$D\mathcal{L}f(t) = \frac{\partial}{\partial t} \int_0^{+\infty} e^{-tx} \frac{\sin x}{x} dx = \int_0^{+\infty} \frac{\partial}{\partial t} \left(e^{-tx} \frac{\sin x}{x} \right) dx = -\frac{1}{1+t^2}$$

- 2) 読者への練習問題とする。